

令和3年度
静岡県立大学短期大学部

F D 委員会報告

I 令和3年度FD委員会活動について

令和3年度FD活動の基本方針

FD事業本来の目的に立ち返るという基本方針のもと、PDCAの手法を視野に入れてFD活動の全面的なチェックを行いつつ継続的な事業の実施を行った。また、前年度に引き続き、コロナ禍という状況下にあった令和3年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止に向けた静岡県立大学の活動指針に沿った内容となるよう、事業計画を策定し実施した。

基本方針に従って実施した事業は以下のとおり。

- ・FD講演会
- ・授業評価アンケート
- ・FD資料展示
- ・「FD活動報告書」の編集発行・公開
- ・FD研修
- ・委員会開催

以下にその詳細を報告する。

1. FD講演会

- ・第1回短期大学部FD講演会

日時：令和3年6月24日（木）16：20～17：50

実施形態：対面、Zoomによるライブ配信、オンデマンド

講師：静岡県立大学副学長（小鹿キャンパス将来構想担当）渡邊順子氏

演題：「大学教員へのトランジションを考える」

参加者：39名

本学の統合再編として新学部構想が検討される時期となるので、短期大学部教員が自身のキャリア形成を今後どのようにプランしていくのかを考えるにあたっての有益な講演であった。

- ・第2回短期大学部FD講演会

日時：令和3年12月16日（木）17：30～18：30

実施形態：Zoomによるライブ配信、オンデマンド

講師：静岡県立大学短期大学部 講師 高田佳輔先生

演題：「ゲーミフィケーションを用いた授業の開発と試行錯誤」

参加者：35名

本学教員による講演で、同僚の授業実践について聞く貴重な機会となった。授業に参加する学生の動機付けや主体的に課題設定できる組み立て、教員から学生へのコメントの返し方等について、とても参考になる内容であった。

2. 授業評価アンケート

昨年度内容の見直しを行った質問項目を用いて実施した。実施方法は、本年度もコロナ禍の影響を受け遠隔授業で実施された授業もあったため、ユニバーサルパスポートを經由してオンライン方式として、前期、後期それぞれ実施した。

3. FD資料展示

小鹿図書館と共催で、FD資料展示コーナーを設置した。近年刊行されたFD関連書籍の中から、委員会で展示書籍を選定して3月に実施した。

4. 「FD活動報告書」の編集発行・公開

昨年度と同様、授業アンケートの集計が納入されてから、下記の内容で報告書を作成することを決定した。これまでどおり、①紙（冊子）②DVD（CD-R）③WEBの3種の媒体を作成する。

- ・授業評価に対するフィードバック
- ・授業評価アンケートの現状と課題
- ・各種事業の実績報告

本委員会報告書は、授業評価アンケートへのフィードバックを含むため、翌年度に前年度委員が作成・公開している。

5. FD研修

新学部構想に関連して、「静岡県立大学及び静岡県立大学短期大学部再編・統合に係る調査事業」（開講研）による個人調書作成に関する説明会を開催した。

- ・日時：令和4年3月24日（木）16:00～17:00
- ・実施形態：オンラインによる
- ・対象者：短期大学部専任教員

6. 委員会開催回数

5回

II 学生による授業評価アンケートの実施方法および教員のコメント

1. アンケートの実施および教員にコメントの作成について

1. 1. 授業評価アンケートの実施方法・内容

学生による授業評価アンケートの実施方法は、新型コロナウイルス感染症による遠隔授業実施を踏まえて、後期のみユニバーサルパスポートを経由してオンライン方式で実施した。授業評価アンケートの内容は、昨年度見直しを行った新たなもので本年度も実施した。

実施方法は次の通りである。

- ① アンケートの実施時期は、早期終了科目は授業第 8 週より、15 回実施科目は授業第 14 週より回答開始とし、回答期限を集中講義/補講/試験期間の最終日とした。
- ② 授業担当教員が授業ごと、学生に入力を指示した。
- ③ ユニバーサルパスポート経由で回答されたデータは学生室がダウンロードする。
- ④ 学生室は質問項目ごとの集計及び自由記述欄の転載を外部業者に委託する。
- ⑤ 業者から納品された④の教員個々のアンケート集計と自由記述を転載したものを封筒に入れ、FD委員会から各教員へ配布し、「教員によるコメント」の執筆を求めめる。
- ⑥ 上記①～⑤は、本学専任教員および非常勤講師の担当科目をアンケートの実施対象とする。但し、現段階では非常勤講師の場合は、協力依頼とする。
- ⑦ 担当科目のうち、回答者が 5 名以下の場合は、集計を行わない。
- ⑧ システム上、授業科目ごとの評価となるため、担当教員 2 名以上で担当している科目は、履修科目一覧表の 1 番目に名前が記載されている教員に結果を渡す。
- ⑨

1. 2. 授業評価アンケート用紙

昨年度見直しを行ったアンケート項目と同様に、3 つの大項目を設定し、「あなた自身の取り組みについて」(7 項目)、「授業について」(13 項目)、「遠隔授業の方法について」(3 項目)、計 23 の質問項目を設定した。各質問ともに「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」までの 5 段階によって行なわれる。自由記述欄は、「この授業でよかったと思うこと」、「この授業で改善が必要だと思うこと」と、アンケート項目だけでは表現しきれない当該授業に対する学生のコメントを具体的に述べられる内容となっている。

授業評価アンケートで使用した質問項目

あなた自身について	1	自分は、授業を受けるにあたりシラバスを読んだ。
	2	自分は、この授業に欠席や遅刻をしないように努めた。
	3	自分は、この授業を意欲的な態度で受講した。
	4	自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。
	5	自分は、予習復習（提出課題を除き）をして理解を深める努力をした。
	6	この授業の内容は良く理解できた。
	7	自分は、この授業を受けて、この分野に対する興味、関心が増した。
授業について	8	シラバスに授業の目的、授業の到達目標、授業の計画と内容、評価の方法が明示されていた。
	9	授業の目的と到達目標から見て、授業の難易度は適切であった。
	10	授業は、シラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた。
	11	毎回の授業の量と範囲は適切であった。
	12	教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた。
	13	教員は、学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた。（説明の仕方、授業形態、配付資料、板書、情報機器の活用など）
	14	教員は、学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫をしていた。
	15	教員から与えられた課題（宿題、レポート）は、質・量ともに適切であった。
	16	教員に授業に対する熱意が感じられた。
	17	教員は、学生に対して誠実に対応していた。（質問への対応、レポートへのコメントなど）
	18	成績評価の方法は適切であった。
	19	この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった。
	20	安全についての指導や配慮が十分なされていた。（実習科目のみ回答）
No.21～23は遠隔授業が行われた科目について回答してください。		
遠隔授業について	21	遠隔授業の方法は、授業内容の理解の上で適切だった。
	22	遠隔授業は、学生が興味を持って取り組めるよう工夫がされていた。
	23	遠隔授業での課題は、学生が主体的に学べるように配慮されていた。
その他の意見		
・この授業で良かったと思うこと		
・この授業で改善が必要だと思うこと		

1. 3. 教員によるコメント作成方法

教員はアンケート結果を踏まえて、「教員によるコメント」を作成する。

その他の作成方法も含め、実施要領を作成し非常勤を含め全教員に配信した。

1. 4. 公表の目的と方法

上記は「教員によるコメント」として『令和3年度FD委員会報告』に記載し本学 web 上に公表する。

公表の主要な目的は、教育の根幹である授業が広い公共性を持つこと、およびその費用の大半を県費で賄っていること、この点に起因する公開責任と説明責任からである。本学で今年度行なわれた授業についての学生の評価に対して、教員がどのようにそれを受け止めて改善しようとしているかを報告書として可能な限り公表し、本学に課せられた社会的な責任の一端を果たそうとするものである。

2. 教員によるコメント

以下に、アンケート結果に対する教員によるコメントを載せる。掲載順は以下の通りである。

i) 専任教員

①一般教育等、②歯科衛生学科、③社会福祉学科社会福祉専攻、④社会福祉学科介護福祉専攻、⑤こども学科（学科等、専攻の中は職位順、職位の中は五十音順）

ii) 非常勤講師（五十音順）

学科・専攻：一般教育等 職名：教授 氏名：鶴橋俊宏
対象科目：言語と表現（講義）

本講義は言語そのものに対する深い理解を醸成することを目的としている。ことばそのものの性質を理解することは、人間の思考およびコミュニケーションと、言語との関係を理解するのに必須な知識である。それが「人間理解」に置かれている理由である。

ことばの意味を深く理解することは論理的な思考の基礎であるが、ことばによる論理とは何か、学問的知見に基づいて考える機会は多くない。しかも、学内的にことばの知識が減少している。こういう状況に危機を感じ、ここ数年語彙の構成と構造に関する知識として「定義」「分析」の二つを例に展開している。

日本語を対象とした言語の学は、時に「表現法」と混同されることがある。もちろん、無関係ではないが、単なるスキルの伝達ではなく、言語の本質を考究することを目的とし、言語を客観的に観察・説明しようとする点で異なる。小鹿キャンパスは「専門学校」化しているとの声があるのでこの点は特に強調している。

ほとんどの学生にとっては未修の分野と思われるので、独自にテキストを編み、全ての学生が同じスタート・ラインに立てるように工夫している。ことばという実体がつかみにくいものを対象とするので、できるだけ実生活に即した例を取り上げ、英語を中心とした外国語の例をもとりあげ具体的なイメージを喚起するように努力している。

また静岡の文学と方言を紹介し、この地の言語文化についての理解と興味とを深める努力をしている。

人間の精神活動の重要な部分であるので、双方向型の授業により各自の生活に即した方向で理解を深めてもらうよう講義を行うように心がけている。これが奏功し受講生諸君は意欲的に授業に参加してくれ所期の目的に近づけたと思うが、二年次に移された授業は受講者が減ってしまった。また、この二年はオンラインで行ったため、受講者からの声を聞きながら進めることには多くの困難があった。そのためか、受講者の理解に差が生じてしまった。ことばの運用能力はフィジカル・トレーニングに似ていることを力説したが具体的にそれを体験する機会が少なくなってしまったことを残念に思う。

学科・専攻:一般教育等 職名:教授 氏名:林恵嗣

対象科目:体育実技(実技)、健康科学論(講義)

【体育実技】

令和3年度は、履修者数が多くなる社会福祉学科社会福祉専攻とこども学科の授業において、2組に分けて実施した。一方が対面授業を実施する場合、もう一方を遠隔授業として実施し、3～4週で交代して実施した。また、対面授業時でも遠隔授業を希望する学生に対しては、遠隔授業対応とした。遠隔授業では、昨年度と同様に、学生自身で運動内容を考えることとした。これは、学生毎に体力水準、運動内容に対する好み、自宅周辺の運動環境等が異なるためである。歯科衛生学科においては、基本的に対面授業とし、遠隔授業を希望する学生に対しては、遠隔授業対応とした。

歯科衛生学科においては、対面授業の割合が増えたことで、授業評価が全体的に改善されたと考えている。社会福祉専攻とこども学科においては、昨年度は1週毎に対面授業と遠隔授業を切り替えながら実施していたものを、今年度は3～4週で交代する形に変更したことで授業内容を継続的なものへと変更することができた。学生的には昨年度よりもやりやすかったのではないかと考えている。このような変化が授業評価の改善につながったと考えている。

今後は、対面授業が原則となるが、状況次第では遠隔授業も実施することが予想される。遠隔授業の際には、これまで以上に課題や目標をはっきりさせて取り組めるようにしていきたい。

【健康科学論】

令和3年度は、基本的には対面授業として実施した。年明け以降は、オミクロン株が流行したため、遠隔授業を希望する場合には、遠隔授業対応とした。昨年度から、遠隔授業でも対応できるように授業資料を作成し直しており、さらに令和3年度においては授業内容全てを、パワーポイントを用いて実施する形式とした。それに伴い授業での説明方法も変わったことで、昨年度よりは授業評価が改善した(特にこども学科において改善が見られた)と考えている。

授業内容に関しては、難しいという意見が毎年出てくるが、その一方で興味がある学生も存在していることから、そういった学生の知的好奇心を満たすためにも授業内容の難易度としては今後も維持していくつもりである。しかし、その分、授業で用いるパワーポイントの内容をもう少し分かりやすくして、注目するポイントを絞るように工夫して対応する予定である。

学生への要望として、難しいと感じるのであれば、わからないところを質問するように努力してほしいと思います。わからないところを確認しない限り、ずっとわからないままになってしまうと思いますので、自分自身も努力するようにしてほしいと思います。

学科:一般教育等 職名:講師 氏名:有元志保
対象科目:英語(演習)

本科目では、NHK NEWSLINE で放送されたニュース映像と、それに関連した文章を通じて英語を学習する教材を使用した。基礎的な英語力の向上とともに、国内外の時事問題に対する関心と理解を深めることを目指した。

今年度は、感染症対策を講じて教室で対面授業を実施した。密集を防止する必要性から、ペアワーク時に制限を設けたり、換気のためドアを開放したりと、受講者には様々な不便をかける一年であった。受講者の理解と協力を感謝したい。

授業では、文章読解や映像視聴の際に、口頭での十分な説明が困難な場合もあるため、パワーポイントの資料を補助的に使用した。教員にとっては、受講者の反応を確かめながら授業を展開しやすいという利点があり、受講者からもわかりやすいと好評を得た。毎回授業の最後にはコメントシートと小テストによって理解度を確認した。コメントシートの内容の一部はクラスで共有し、不明な箇所が残らないよう、また、授業内容の発展的な理解を促すよう努めた。授業評価アンケートや、定期的実施したテストの結果からは、概ね目標が達成できたと判断できる。

グループワーク実施時の受講者同士の相互評価に関しては、その結果を成績に反映することに対する否定的な意見もいただいた。学生の主体的、積極的な学習を促しつつ、不平等感を生まない工夫を今後も続けていきたい。

学科・専攻：一般教育等 職名：講師 氏名：上田一紀

対象科目：情報処理演習（演習）、情報の活用（演習）、情報と生活（講義）、現代社会学（講義）

[情報処理演習]（演習）

本科目の到達目標は、PCの基本操作、PCを用いた文書作成、データ処理（表計算、グラフ作成）、インターネットの利用、プレゼンテーション資料の作成を行えるようになること、である。

[情報の活用]（演習）

本科目の到達目標は、クラウドコンピューティングシステムをPCとスマートフォン（複数端末）で活用できるようになること、情報の活用（情報の収集、編集、発信）に関する技法を習得し、コミュニケーションツールとして使用できるようになること、である。

⇒ 両科目ともにオンデマンド型（講義動画の視聴＋各自の情報機器の操作）で実施した。PCやネットワーク環境が整っていない受講生には、学内の情報処理教室での受講を促した。「動画がわかりやすかった」「できるようになったことや知ったことが多かった」「繰り返し動画を視聴できる点がよかった」等のプラスの評価を多く得ることができている。

⇒ 両科目ともに、対面で実施してほしいという意見があった。そのため、2022年度は（Covid-19の感染状況をみつつ）感染対策を十分に講じた上で、希望者には情報処理教室での受講を認め、講義を進めたいと考えている。

[情報と生活]（講義）

本科目は、情報機器（PCやスマートフォン）やネットワークシステムの基本的な仕組みや特徴を理解すること、情報セキュリティや情報倫理を考える際の基本的な枠組みを理解すること、情報の法（情報法、メディア法）の基本を理解すること、を目的としている。

[現代社会学]（講義）

本科目は、社会学的な考え方を身に付けること、社会学の基礎知識・代表的な理論を理解すること、社会学的思考を日常の出来事や現象に適用できるようになること、を目的としている。

⇒ 両科目ともにオンデマンド型で実施した。実施形態に関する意見はなかったが、内容に関しては、「興味が沸いた」「新たな分野について知れたことがよかった」等のコメントを得ることができた。しかし、専門用語等が難しく内容が入ってこない、という意見もあり、今後、これまで以上に、図解や例示を丁寧に行っていく予定である。

学科：一般教育等 職名：講師 氏名：高田佳輔
対象科目：「データサイエンス入門（歯科1年）」

- ・あなた自身の取り組みについて
- ・授業について
- ・遠隔授業の方法について

いずれについても、当科目平均点が学科選考平均点を上回る点は、授業方法での工夫の効果が出ていると考えられる。

授業についての項目では、課題の難易度と成績評価についての項目が他の項目と比較してやや低い数値を示している。これに関しては、第1回の授業および事前説明において説明を行っている点であり、今後はいっそう本授業の難易度が伝わりやすい説明を心がける。

学科：歯科衛生学科 職名：教授 氏名：仲井雪絵

対象科目：【後期のみ】① 口腔衛生学Ⅱ（講義），② 臨床歯科診査法（講義），

③ 救急処置法（講義・教員3名で分担），

④ 臨地実習Ⅲ（実習・学科教員全員 [10名]で分担）

※ 2021 前期 担当科目授業アンケートなし [小児歯科学，口腔発達学，臨床歯科医学序論，口腔衛生学Ⅰ，臨地実習Ⅰ，臨地実習Ⅱ].

I 授業の目標・工夫

本年度は昨年度から続く COVID-19 の世界的拡大のため，大変困難な教育環境であったが，Advance な内容を盛り込みための挑戦を続けた．上記の後期授業全てに関しては，さらなる学修効果を追求し，感染拡大防止に最大限配慮して全て対面授業で実施した．歯学部における医療面接教育のトップレベルの教育研究者（医療系大学間共用試験実施評価機構委員）を2017 年以来招聘し，日本で最先端の歯科医療面接および動機づけ面接法の学修機会を実現化している．2021 年度も，上記④の中で模擬患者参加型の Motivational Interviewing（動機づけ面接法）を導入した．

臨地実習Ⅲについて学科の代表として述べるならば，歯科衛生実践実習に関しては1年間を通して本年度より画期的な教育改革を行った．臨地実習Ⅰ期・Ⅱ期には学内教員による少人数ゼミ形式を導入し，歯科衛生ケアプロセスの思考過程を育むための症例検討シミュレーション教育を実施した（教員1名につき学生4名）．そして臨地実習Ⅲ期では実習先より患者配当を受けて，Ⅰ期・Ⅱ期で習得した総合力を駆使し，学内教員と実習先指導員の双方向からの指導様式で理論と実践の発展的融合を図った新たな臨床教育に取り組んだ．昨年度に引き続き歯科衛生実践実習発表会も開催し，根拠に基づく論理的思考ならびに議論する力と，症例検討に不可欠なプレゼンテーション能力を修得できるよう鋭意努力した．

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケート集計結果を供覧すると，「I あなた自身の取り組みについて（5点満点）」は①4.53，②4.46，④4.58，「II 授業について（5点満点）」は①4.74，②4.92，④4.40，「III 遠隔授業の方法について（5点満点）」は①4.41，②3.82，④3.22であった．後期科目は，全て対面方式で実施し，遠隔方式は皆無であったため，「III 遠隔授業の方法について」という設問は完全な愚問である．にもかかわらず，同アンケート項目に対する回答がなされているのは奇異であり，その評点の信頼性・妥当性は無いと言える．このような愚問を放置・実施した授業アンケートの早急な改善を求めたい．

少人数形式で実施した実践実習（臨地実習Ⅲ）について，「保健指導についての学びが多くあった．難しく大変であったが，これからにつながることを学べた」「歯科医師の対応がよかったこと」「1・2期をふまえて，より実践的に実習することができた．実践実習も大変ではあったが，充実し達成感のあるものとなったのでよかった．」というポジティブな意見の

他, 1名の学生から「チューター(教員)によって不公平」だったというネガティブな記述があった。いかなる医療系教育機関においても, 担当教員によって指導に「違い」が生じるのは当然である。「違い」を「不公平」だと捉える未熟さ, 努力不足を他人のせいにする学生の受け身の態度・姿勢を改善できなかったことが残念である。主体的に学ぶ姿勢, 問題解決する姿勢を全ての学生が醸成させるまでに至らなかったことが反省点である。

Ⅲ 学生に期待すること・学生への要望等

短大・大学で学ぶ上で, 教えてもらうことを待つだけの受動的態度では力がつきません。答えの無いもの, 未知なるものに対して謙虚に食欲に積極的に追究し問題を解決しようとする姿勢は, プロになった後も必須です。自分の未熟さを他人のせいにする事なく, 成長を目指して努力をしましょう。

学科：歯科衛生学科 職名：教授 氏名：吉田直樹

対象科目：生化学（講義）、口腔生理学（演習）、口腔微生物学（講義）、微生物学（講義）、
歯周治療学（講義）、歯科衛生統計学（講義）

I 授業の目標及び授業において工夫していること

歯科衛生学科の学生は、卒業すると、「短期大学士」の学位とともに「歯科衛生士国家試験

受験資格」を取得する。

授業においては、全ての学生が国家試験に合格するために必要な知識を確実に伝え、十分に理解させることを、目標としている。要点を示して、簡潔に伝えることを心がけている。

しかしながら、講義においては、単に教科書に記載されている知識を与え、学生は、それを得るということに留まらないようにと考えている。いわゆる詰め込み教育となってしまうのは、学生が「自主的に学ぶ」という機会を奪ってしまうことになり、将来、「受け身」の姿勢で学ぶことから抜け出せなくなってしまう恐れがある。学生は卒業後、学問を続けて行くこととなる。

本学に在学している時間よりも卒後の時間の方がはるかに長い。したがって、学生ひとりひとりが、短期大学において「学問をした」という実感を卒業後にも永く持ち続けられるような内容の授業を行いたいと考えている。

日常の授業において、学生ひとりひとりが「自分は学問の場に身をおいている」という実感を持てるようにすることを心がけている。学生自身が「学問」をしているということを感じられること。つまり、それぞれの科目が、学問としての体系を有していること、先人達の研究によるエビデンスの蓄積が教科書に記載されているということ、そして、それは現時点のものであって、将来的には変化して行く可能性もあるということを理解させるように努めている。

授業を理解しやすくする工夫としては、PowerPoint や動画を活用している。また、OHC (Over Head Camera) を用いて、歯科に関する模型や患者説明用の冊子等の現物を、投影して見せるといったことも行っている。さらには、模型等を教室内で「回覧」することもある。

学生に配布している紙ベースのレジュメに関しては、重要語句の部分などを空白にして、学生が書き込んで完成する様式を用いることにより、学生の集中力が維持されるように工夫している。

また、90分授業においては、授業の中頃に、質問を受け付ける時間帯を設け、講義室内を巡回することによって、学生が疑問点を解決しやすいようにしている。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケートの結果は、良好であったと考えている。

今後の改善としては、学生が講義を受けた後に、その分野に関して自主的に学びたいと思う

ような授業を行いたい。

理想としては、学生には難解なものに挑戦させて、自らの力で理解して行こうと努力する時間を十分に与えたい。学生が「自ら考えることによって、理解するというところにたどり着いた。」という喜びを得られる機会を多く持てるような授業にしたいと考える。

Ⅲ 学生に期待すること

全ての学生というわけではないが、多くの学生において「丁寧な授業」言い換えれば、「痒い所

に手が届く」授業を、良いと考える風潮があるのではないかと感じている。理想的には、教員が講義の内容をまとめるのではなく、学生自身が内容をうまくまとめて、自分なりにノートすることができることが望ましいと考える。学生が、自主的に学ぶという方向に持っていきたいと考える。将来、学生が卒業後に学び続けるなかで、自分自身で能動的にノートをとれる能力を身に着けることを希望する。

個人的には、学生が容易に理解できる授業を行うという方向に、教員が向かわされているのではないかと、疑問を感じている。近年、よく言われている、マニュアルが無いとうまくできない人を生み出す危険性をはらんでいるのではないかと。学生にとって「わかりやすい」授業は良い授業であるのかも知れない。しかしながら、学生が、「わかりにくい」ということを、教える側の教員が悪いということにしてしまい、「わからない」ということを自身で解決しようとしないうちはいけない。全ての授業が、理解しやすい授業ばかりになってしまうことは、本当に望ましい状況と言えるのだろうか。わかりにくく表現されたものを、何とか理解しようと学生が努力することは重要な知的活動となると思う。

社会人になってからは、そのような能力が必須であろう。学生には、容易にはわからないものに対して、「面白い」、「挑戦してみたい」、と思うような気持ちを持ち続けてほしいと希望している。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：准教授 氏名：長谷由紀子

対象科目：学校歯科保健実習（講義）、マネジメント論（講義）、学校歯科保健実習（実習）

【授業の工夫】

マネジメント論では、反転授業とその補足講義、事例に基づいた個人・グループワークを中心に授業を進め、論理的な歯科衛生実践の考え方のトレーニングとなるよう、積極的な参加を促すように工夫して実施した。学校歯科保健論・学校歯科保健実習では、1年次までおよび同時期に履修した科目の学習内容を活用し、学校歯科の対象者に合わせた歯科保健行動に関する「ねらい」を達成するための指導方法を学生自身で立案、実践するための学習支援を行うよう心掛けた。歯科衛生実践の根拠を念頭におき、歯科衛生士の専門性に基づく歯科衛生ケアプロセスや保健指導の立案など論理的な考え方を重視して講義・実習を行った。定期的に学生が取り組んだ課題（ポートフォリオ）を提出してもらい、各学生の学習状況（成果）の把握とフィードバックを行い、個人に合わせた指導と学生の能力向上に努めた。

【授業についての自己評価と今後の改善・工夫】

今回、自由記述の感想から、学生一人一人の学習状況の把握とそれに応じた形式的なフィードバックは引き続き実践していきたいと感じた。今後は、提出された課題や学習ファイルからだけでなく、授業中にもなるべく個々の学生の学習状況を確認、把握し、その場で適切なフィードバックが可能な限りできるよう、教員側からのアプローチとともに学生からコメントや質問をしやすい環境づくりに努めていきたい。授業内容の難易度については、学生の理解度に応じた分かりやすい説明と伝える能力、状況に応じた指導方法を研鑽していくべきである。授業課題の質と量については、随時学生の様子や状況を把握し、学生の認知的負荷を鑑みて、学生の確実な能力獲得に相応しい課題の提示と学習支援が行えるよう尽力していきたい。また、学校歯科保健論において、グループのメンバー分けについて勝手に決めたと言及があったが、グループ分けを学生に任せるのは難しいことをご理解いただきたい。学生には、この実習を通して仲が良い友達だけでなく、様々な人と協力して意見を交わし物事を達成していく経験学習として、多様な人との関わり方を学ぶ機会ととらえてほしい。

【学生に期待すること】

授業に関して率直なご意見をお願いします。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：准教授 氏名：野口有紀
対象科目：歯周疾患予防処置論（講義）、地域歯科保健実習（実習）

I 授業の工夫など

専門分野における知識・技能・態度を取得し、授業の役割の明確化する運営を目標とした。基礎と専門科目、座学と演習・実習などの多方面の授業内容の連携をはかり、実践する能力を修得する組み立てとした。

- ・ 動機付けの工夫として、現場の情報・体験情報・最新の基幹統計や一般統計など調査結果および原著論文を取り入れた理論と実際のマッチングを意識した授業運営を行った。
- ・ 概念理解の形成を助ける工夫として、図・写真・グラフなどを活用した教材を使用した。
- ・ 学習意欲を高める工夫として、理解度・反応がわかるよう授業内でマークシート形式の小テストを行った。小テストは国家試験に準じた形式で行った。答えあわせおよび解説を行い、理解の確認と定着を図った。
- ・ 授業参加を促す工夫として、授業中の理解度を成績評価に反映させた。
- ・ 情報技術活用の理解と工夫として、視覚教材を用いた。
- ・ 事前学習として必要な部分を自ら判断し、事前学習するように促し、修得した基礎科目の知識の見直しを課した。
- ・ 問題発見・解決能力を高める工夫として、ケース・メソッド、社会と連携した最新の情報・調査結果を取り入れた授業の実施に努めた。
- ・ 理解度に合わせた指導の工夫として、オフィスアワーを設定し丁寧な対応を心掛けた。
- ・ 成績評価の工夫として、筆記試験のみに偏向しない多面的成績評価をした。
- ・

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

授業アンケート集計結果の「I あなた自身の取り組みについて」「II 授業について」「III 遠隔授業の方法について」のすべての項目において、学科平均点より高かった。特に、「II 授業について」では4.6~4.9であり、特に「学生の理解度に配慮して授業を進めていた」「学生の理解が深まるよう授業方法を工夫していた」「安全についての指導や配慮が十分なされていた」「遠隔授業の方法は、授業内容の理解の上で適切だった」では非常に高い平均点であった。工夫した授業運営により、興味・関心を持ち、理解が深まったと思われる。今後も同様の手法を用い授業展開を図っていく。さらに、学習意欲を高め、理解力が深まるよう、下記について改善・工夫に努めたい。地域歯科保健実習の科目の「疑問点を必要に応じて教員に質問した」の項目の平均点が、他の項目に比較し低い傾向であった。コメントシートの十分な活用やオフィスアワーの周知などさらなる取り組みの工夫の必要がある。今後も、学習意欲を刺激し、理解しやすい授業運営が出来るよう改善を心がけていく。

Ⅲ 学生に期待すること・学生への要望等

事前学習・事後学習などの課題設定を含め、授業内容をよりよく理解し実践に役立てるよう、能動的な学習ができるようにして欲しい。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：講師 氏名：松原ちあき
対象科目：障害者歯科学（講義）、障害者歯科保健介護論（講義）

1. 授業の工夫

障害者歯科学では、「スペシャルニーズよび障害の概念を理解し、障害児者に対して歯科衛生士の立場から支援する際に必要な知識を修得する」ことを、障害者歯科保健介護論では、「加齢や障害に伴う身体・精神諸機能の変化や、高齢者・障害者の疾病の特徴を理解し、社会的ニーズに即した支援ができる歯科衛生士の基盤となる知識を修得すること」を目的として講義を実施した。

講義内では、基礎的な疾患や法律に関する知識を実際の臨床での事例や症例を提示しながら、定着を図った。症例では、実際に実施しうる口腔機能管理を検討する課題を与え、アクティブ・ラーニングを促した。

また、高齢者・障害者の分野では専門的な研究が日々アップデートされているため、専門の講師を招致し、臨床のイメージや最先端の研究に関する情報を得るための機会を作った。

2. 授業についての自己評価と今後の課題・工夫

授業アンケート集計結果から、症例の提示や写真、動画の使用に関する点で評価を得た。自らの臨床経験上の写真や動画を使用しているが（患者、病院の同意のもと）、今後日々アップデートする高齢者・障害者歯科分野の臨床現場の状況も更新できるよう、常に臨床・研究業務への研鑽も積んでいきたい。

「成績評価の方法」については、他の質問項目に比べ、標準偏差が大きかった。全ての学生で試験への到達度が高く、知識の定着度に成績の差があまり大きくなかったことが要因と考えられる。学生全員が平等に評価されるよう、授業への積極性などを授業内での小テスト等の実施を検討したい。それにより授業ごとの意欲、知識の定着度を評価することが可能となる。

また、新型コロナウイルス感染症の状況での対応は、すべて講義科目であったことも踏まえ、あまり検討しきれていなかったため、今後にも備え、検討していくべき課題であると考えられる。

3. 学生に期待すること・学生への要望等

授業内で分かりにくい点や改善点等に関する意見をいただきたい。また、高齢者、障害者といった専門分野に特化した科目のため、さらに深く知りたい点など、自らの興味に合わせた意見があると嬉しい。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：講師 氏名：森野智子

対象科目：歯科保健教育法（講義）、コミュニケーション演習（演習）、高齢者歯科学（講義）、
障害者歯科保健介護実習（実習）、歯科衛生倫理（講義）

I 授業の工夫

コロナ禍2年目となり、例年通り「根拠ある知識を身につけ、論理的な思考力を育み、それを行動に繋げる」学生教育を目指し、多くの内容を盛り込んだ授業構成を目指しました。急遽担当することになった前期2科目（高齢者歯科学、障害者歯科保健介護実習）に対応するために、他教員の協力を得るなど工夫しました。1年次の概論科目では、新入生でもわかり易い到達目標を示し、2年次の授業では、旧知の事実から最先端事例に至るまでの情報を多数紹介しました。

思考する機会を設け、考えながら手法や技術が定着する学修を目指しています。常に、根拠を明確にした説明をしつつ、身体や心を動かす機会を持つような授業を心掛けています。また、学生の参加評価が低い傾向がある、「自分（学生）は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。」については、引き続き、授業の終わりに質問時間をとったり、レポートに質問記入欄を設けたりするようにして質問の機会を増やす努力をしています。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

急遽担当した前期2科目（高齢者歯科学、障害者歯科保健介護実習）は準備期間が少なかったことから、授業についての評価点がやや低い（4.50、4.13）結果でした。同じ前期科目の歯科保健教育法（講義）も、例年と比較して低い（4.44）結果でした。これは、時間的に厳しいスケジュールが影響したと考えます。

一方、同じ前期科目のコミュニケーション演習（演習）は、他教員に協力を得ることが出来たためか、例年通りの評価（4.81）でした。毎回、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。」への評価が低いため、今回は直接学生に原因を尋ねたところ「教員が、分からないところがなくなるまで説明してくれるので、疑問点はない。」とポジティブな回答がありました。しかし、今年度急遽担当することになった2科目については、同じ理由だとは思えません。これらの科目は、今後担当する予定がないので、改善や工夫の余地はないですが、さらに学びを深めて頂くために、どの科目でもより深く考えたいというヒントを伝えるような努力をします。

自由記述には、「課題やグループワークを通じて理解が深まった」、「実務（教科書にのっていない臨床の）経験談を交えた授業が分かりやすかった」という感想が複数ありました。今後も、学生の興味や理解度を把握して、ニーズにしっかり応えた教育を行いたいです。なお、基本的に遠隔授業は実施しませんでした。

Ⅲ 学生に期待すること・学生への要望

学生が出席するのが楽しみだと思えるような授業を提供するように努めています。社会人になる前に、大学で学ぶ意味を考えて、能動的に授業に参加して下さることを願います。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：講師 氏名：山本智美

対象科目：歯科予防処置論（講義）、感染予防法（演習）、齶蝕予防処置実習（実習）

I 授業の目標、工夫、自己評価

今年度は感染予防対策に配慮しながら、すべて対面での授業を実施することができた。

「歯科予防処置論」では歯や口腔の健康の保持増進の考え方、予防方法等について理解することを目標とした。

歯科疾患実態調査の結果の推移や関連する最新のデータを提示し、口腔保健の現状について各自で分析し、グループごとに発表する機会をもった。また、例年実施しているが、今年度も感染予防に十分配慮し、口腔内でのプラークコントロール（歯垢染色、ブラッシング）の演習を実施した。自身の口腔内を観察する機会を得たことにより、口腔衛生について関心が高まったと思われる。

妊産婦期、乳幼児期から老年期までライフステージごとの特徴、口腔の問題点等について事前課題を提示した上で授業を実施した結果、「主体的に学ぶことができた」「理解が深まった」等の感想が寄せられ、予習を事前課題の形で実施することは、学生の興味関心を高めることにつながると思われた。「感染予防法」では日々の生活において、コロナ禍における感染予防対策の重要性を十分認識しており、授業に対する評価は高かった。この授業では、感染予防対策の原則、滅菌・消毒等に関する基本的な知識を習得し、歯科医療現場における感染予防対策、医療安全について理解することを目標とした。

演習では基本となる手指衛生（消毒）に対する動機づけをブラックライト下での蛍光塗料塗布、手洗いにより確認し、滅菌・消毒・洗浄の実際については実習室の器材等を目で見て触れて体験したことで理解を深められたと思われる。また日常生活でのインシデント収集、要因、解決策を考える機会を設け、それを元に歯科医療現場でのリスクマネジメントへの導入をはかった。その後、臨床でのヒヤリ・ハット事例検討（グループワーク）を行うことにより事故防止への意識向上をはかった。

「齶蝕予防処置実習」（前期）については、齶蝕予防処置の対象は小児であることが多いため、相互実習において小児への声かけ、対応を体験しながら、対象者への対応を意識した実習を実施した。学生の感想から講義で学んだことを実際に体験したことにより、より知識の理解が深められたようであった。

アンケート集計結果では、学生の取り組み、授業について、ともに学科平均点と同等または上回っていた。小テスト実施について事前に予告し、数回実施したが、解答の理解が半分にも満たない学生がみられた。学んだことを振り返る機会が小テストという認識でもあるが、学生自ら主体的に学ぶ姿勢を支援する方法を再検討する必要があると感じた。コメントシート、提出レポートについては、一人ひとりに丁寧なコメントを心がけ、学生の意欲向上につながったと思われる。

Ⅱ 今後の改善・工夫、学生に期待すること

小テストや定期試験において、例年になく点数が低い学生がみられた。プリント、講義スライド・資料の作成等、見直し工夫し取り組んでいるが、授業へ自ら参加する、目的意識をもって主体的に学習する積極的な姿勢を期待したい。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：助教 氏名：鈴木桂子

対象科目：歯科診療補助論（講義）、歯科受療支援論（講義）、歯科衛生士業務記録法（講義）

・授業の進め方について

歯科衛生士としての自分自身の体験談（失敗例も含む）をふんだんに織り交ぜながら、1年次には歯科衛生士という将来像を描くことができるよう心掛け、2年次の実習においては、歯科診療補助の手技・実技のなかでのちょっとしたコツなどもアドバイスに取り入れ、また失敗したときのリカバリーについても話すようにしています。また臨地実習担当者として、臨地実習に赴くにあたっての心構え、身だしなみ、言葉遣いといったマナーや取り組み、コミュニケーションといった基礎的なことも身に付けられるよう指導することを心がけています。

・授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「歯科診療補助論」：科目別自由記載には大変多くのコメントが寄せられていました。

「授業に集中できた」「2年生での実習が楽しみである」「教員の熱意が感じられた」といった感想が多かったことで、今後も期待を裏切らないように励まなければとの思いです。また、あなた自身の取り組みについての質問では、“この授業の内容はよく理解できた”が4.92、“自分はこの授業を受けて分野に対する興味、関心が増した”が4.84でしたが、“自分は疑問点を必要に応じて教員に質問した”と予習復習に関する質問に対しては3点台と低く回答されていました。このことから、質問をしやすい雰囲気作りといったことにも気を配り、予習復習する環境づくりにも注力しなければいけないと感じています。「歯科衛生士業務記録法」に関してもほぼ同様の結果でした。

「歯科受療支援論（講義）」：アクティブラーニングを採用し、あらかじめ与えられたテーマについて調べ、発表するという形式をとり、発表後に教員から補足の説明を加えながら進めました。

「自分で発表の内容を調べたことによって理解が深まった。パワーポイントを使うことが今まで少なかったので、この機会を通して学べてよかった」「自分で調べる能力やまとめる能力を身につけることができた」といった意見が多くありました。前年度のアンケートで、発表後にそのテーマについて教員から説明をさらに加える必要性を感じたため、時間配分を修正し解説等を行う時間を多く取り入れました。

学科・専攻：短期大学部・歯科衛生学科 職名：助教 氏名：鈴木 桂子
対象科目：歯周疾患予防処置論（講義）、歯周疾患予防処置実習Ⅱ（実習）

1. 授業の工夫

対象科目となる2科目は、歯科衛生士の主要業務である歯科予防処置のうち、歯周疾患予防に関する科目である。講義では歯周疾患予防に関する理論とその方法について理解すること、実習科目では手技・技能を修得することを目的としている。

- ・ 授業開始時に前回の授業内容に関する小テスト（遠隔授業の場合は課題）の実施及び解説を行い、事後学習の促しと、知識の定着を図った。
- ・ 講義科目では授業終了時にコメントシートを記載してもらい、授業内容に関する疑問点等を把握し、疑問点が残らないように工夫した。実習科目では、振り返りシートを活用し、実習に臨む前に自ら目標を立て、終了後に振り返りを行うことで、能動的な授業参加を促した。
- ・ 実習科目の成績評価の工夫として、筆記試験だけでなく、実技試験を実施し、技能の定着についても評価を行った。
- ・ 実技試験では、ルーブリックを作成・活用し、評価の客観性、公平性に配慮し、学生へのフィードバックを行った。
- ・ 動画教材を活用したり、器材に触れたりすることが可能な場合には実際に器材の操作体験を取り入れ、学生の理解が深まるよう、工夫した。

2. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

各科目の授業評価アンケート集計結果より、Ⅰあなた自身の取り組みについて、Ⅱ授業について、両科目とも4.5以上で概ね良好であった。アンケートの自由記述には、特に小テストや課題により知識の定着につながったといった記載が多かった。上記の授業の工夫により、理解が深まったと思われる。

講義科目の遠隔授業については、授業は遠隔であっても、必要や希望に応じて器具を実際に触れる機会を設けたこと、課題の解説動画を配信したことにより、理解が深まったとの記載が多かったため、今後も遠隔授業を行う際には継続していきたい。

今後の改善点として、2科目とも「自分は授業を受けるにあたりシラバスを読んだ」、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」の項目が、他の項目と比較して低かった。

遠隔授業であっても、シラバスを読むよう促したり、質問をしやすくしたりする工夫が必要であると感じた。

また、新型コロナウイルス感染症の感染者が増加してきた時期に講義科目を遠隔授業に切り替えたことについて、「安心感を覚えた」といった意見があった。

学生が安心して授業を受けられるよう、感染対策に留意して授業を運営していきたい。

3. 学生に期待すること・学生への要望等

講義では、毎回新しく覚えることが多いですが、小テストなどで復習し、知識を定着させながら進めていきましょう。

実習では、まず器具の把持方法、固定など、基本的な操作方法を身につけましょう。

実技試験を受けるのが初めてで緊張する人も多いと思います。実技試験では、「自分ができていないところ」にばかり着目しがちですが、「自分ができるようになったこと」を認める機会にしてもらえると良いと思います。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：助教 氏名：中村和美
対象科目：口腔介護予防・リハビリテーション法（講義・演習）
歯科診療補助・支援実習Ⅱ（実習）

I 授業の工夫

「口腔介護予防・リハビリテーション法（3年前期）」は、スペシャルニーズのある人の口腔環境の改善ならびに口腔機能向上のための支援の必要性について考え、支援を通して歯科衛生士が QOL の向上にどのように貢献するのかを理解すること、障害者関連の他職種との役割分担、連携について理解することを目的とした。

全 15 講のうち 6 講を臨床現場の歯科衛生士、本学介護福祉専攻の教員と連携して 3 回の演習を組み込んだ。

演習①では、各ライフステージにおける歯科保健事業の内容、障害福祉サービスとはどのようなサービスであるか、障害者に対応する際の具体的な注意点、地域における保健・医療・福祉のネットワークの中で歯科衛生士がどのような役割を担い連携していくのか、障害福祉サービス事業所に通う利用者の 1 日の様子をビデオ視聴して、臨地実習で実施する歯科保健活動「歯っぴー☆スマイル体操」を視覚支援等の工夫を取り入れた説明の仕方、言葉の表現の仕方等について、グループごとに話し合う機会をもった。

演習②では、歯科治療時に必要となることの多い行動調整「体動コントロール」方法について、身体拘束(随意の場合)、抑制しないために歯科衛生士にできる行動変容、脱感作を実際に現場の歯科衛生士によるデモンストレーションの後、安全に配慮した上で学生が歯科衛生士役と患者役を体験する機会を設けた。

演習③では、車いす各部の名称、メンテナンスを必要とする箇所、車いすの広げ方・たたみ方といった基本知識から、歯科用診療台への車いすの移乗介助の方法について、学生が歯科衛生士役と患者役となり体験した。また、アイマスクを着用して視覚障害を疑似体験する機会を設け、車いすへの移乗時や走行時に介助者としてどのような配慮をすべきか考察させた。

講義では、スペシャルニーズのある人の口腔衛生管理計画が論理的に立案できるように専門的口腔ケアの特殊性、刷掃指導上の留意点、行動療法や視覚支援を適切に取り入れた具体的な歯科保健指導方法の紹介、生活環境やライフステージに応じて継続的にトータルサポートしていくために必要となる口腔機能訓練の目的や方法、障害の程度を把握した上で対象者を取り巻く介助者や他職種と歯科衛生士との連携の必要性等を、内容に関連する DVD の視聴も取り入れて、教本だけでは学生がイメージし難い部分を理解し易く展開できるように努めた。

「歯科診療補助・支援実習Ⅱ（2年後期）」は、歯科臨床現場において、使用する歯科器材の準備とそれらの基本的取り扱い方法、歯科診療における患者への配慮・患者指導、周術期

における口腔機能管理ならびに歯科診療訪問の概要を修得することを授業の目的とした。3年次の臨地実習(歯科医院実習)に直結する実習科目であるため、歯科治療の流れを理解した上で、治療に応じた使用器材等の取り扱い知識と操作技術、歯科診療中の患者への配慮と患者指導がスムーズに実施できるように、全15回の実習内容を組み立てた。実習を通じて、歯科衛生士としてどのように行動すべきか、なぜそのようにするのかを学生に考えさせる機会を設け、教本には掲載されていない実際の臨床現場でのエピソードも盛り込むことで印象に残るように努めた。授業資料は穴埋め形式を取り入れ、器材等の写真も復習を兼ねて1年次の歯科衛生士教本から数多く引用して掲載した。本実習では、次回の実習で何を学ぶのかを事前に予習して臨むこと、本日の実習では何がうまくできなくてその原因は何かを振り返り、改善策を考えて次回に繋がるように指導した。毎回の実習で参加教員から挙げられる気づいた点は、まとめの時間に学生全体に向けて伝え、よかった点、改善すべき点として共有した。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「口腔介護予防・リハビリテーション法」の令和3年度授業評価アンケート結果より、「I あなた自身の取り組みについて」の平均点は3.79と学科平均を下回った。

「II 授業について」の平均点は4.12であった。「III 遠隔授業の方法について」、全15回の授業は、感染防止対策を徹底して対面形式で実施した。

「I あなた自身の取り組みについて」は、「1. そう思わない」と回答がみられた項目は、「1. 自分は、授業を受けるにあたりシラバスを読んだ」11.1、「4. 自分は疑問点を必要に応じて教員に質問した」11.1、「5. 自分は予習復習(提出課題を除き)をして理解を深める努力をした」7.4、「6. この授業の内容は良く理解できた」3.7、「7. 自分は、この授業を受けて、この分野に対する興味、関心が増した」3.7であった。授業の工夫は試みたが、本講への学生の受講意欲を期待以上に高められなかったと考え、学生がもっと身近にスペシャルニーズのある人に関心をもてるような工夫を取り入れた授業内容で展開していく必要があると考える。

視覚障害を疑似体験した演習のふりかえりシートには、自分が視覚障害者の立場となり、介助者にもっとこうしてほしい点、介助者としてこうすべき点の気づきや、視覚障害者に対応する際は、細やかな配慮や視覚障害者が不安なく安心できるような対応の工夫や声かけの重要性について理解することができたとの記載が多く見受けられ、学生に障害があるということはどういうことなのかを考えてもらうよい機会となった。

本講は、「障害者歯科保健介護実習(3年前期)」科目担当者と実習内容を擦り合わせて、内容が重複しないように授業内容を計画できたことから、効率よく効果的な授業が実施できたと考える。

「歯科診療補助・支援実習Ⅱ」の令和3年度授業評価アンケート結果より、「Ⅰあなた自身の取り組みについて」の平均点は4.6、「Ⅱ授業について」の平均点は4.7であった。

「Ⅰあなた自身の取り組みについて」で、「2.自分は、この授業に欠席や遅刻をしないように努めた」の平均は5.0、「3.自分は、この授業を意欲的な態度で受講した」の平均点は4.8であった。全15回の実習は、感染防止対策を徹底して全て対面形式で実施し、1時限開始の実習であったが、各学生が身だしなみを整えて服装チェックを受け、手指消毒や開始前の器材準備を済ませて、開始時間前には静かに着席していたことから、真剣に実習に臨む姿勢や意識の高さをうかがうことができた。

「Ⅱ授業について」で、「20.安全についての指導や配慮が十分なされていた」の平均点は5.0であった。実習前段階の教員打合せにおいて、その実習で使用する器材等の取り扱い上の注意点ならびに臨床で発生しやすいインシデント事例について、教員間で情報共有・共通認識して実習指導に臨み、学生にも実習各回の冒頭で実習が安全にできるように入念な説明を心がけた。「8.シラバスに授業の目的、授業の到達目標、授業の計画と内容、評価の方法が明示されていた」「10.授業は、シラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた」

「14.教員は、学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫をしていた」の平均点は4.9、「9.授業の目的と到達目標から見て、授業の難易度は適切であった」「13.教員は、学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた」「16.教員に授業に対する熱意が感じられた」「19.この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった」の平均点は4.8であった。毎回の授業では学生のモチベーションを高めるために、一般目標と行動目標を読み上げて学生に丁寧に説明を行った。また、参加教員との打合せ段階で、どのような工夫を凝らしたら学生自身に考えさせられるかという点を重視した意見交換を行い、そこで挙げた意見を授業展開する上で有効に活かすことができた。

実習では毎回、予習・復習レポートを課題として、学生の理解を深める上で役立つと思われるが、提出レポートの点検にかなりの時間を要して返却が滞り、時間が経過してからの返却となってしまったので、今後は、次回には必ず返却して、前回の実習の振り返りを学生がより効果的に行えるように努めたい。

Ⅲ 学生に期待すること

本講は、臨地実習の障害者歯科実習、障害福祉サービス事業所実習、特別支援学校実習に直結する。対象者の疾患、障害特性、口腔や歯の特徴、対象者の背景を理解して日常生活に寄り添うことで、介助者として求められるニーズ、また、口腔環境の改善、口腔機能やQOL向上に歯科衛生士として求められるニーズは何かを考えてほしい。本講で学修した知識と技術を臨地実習、卒業後も臨床現場で生かしてほしい。

常に患者さんへの配慮を優先し、なぜそのようにするのかという確かな根拠をもって歯科診療補助に臨んでほしい。また、安全かつ正確な技術の修得には、授業時間だけでは決して十分とは言えない。積極的に自主練習に取り組んでほしい。

学科：社会福祉学科 職名：教授 氏名：三田英二

対象科目：

・子どもの理解と援助

開講時期が変更され（1年後期→2年前期）、当該年度は、実施されなかった。

・臨床心理学

履修者数が、実施基準の人数に達せず、授業評価アンケートは、実施されなかった。

・心のしくみ（分担担当）

コロナ禍のため、対面での個別授業アンケートにはならず、Webアンケートになり、個別評価にならなかった。

I 授業の目標・工夫など

すべて例年通りの記載となるが、「子どもの理解と援助」は、演習科目であるが、講義期間前半は講義を行った。これは、保育士養成カリキュラムで指定されている内容があるため、受講生が演習を行いやすいように、この内容に関連した内容を講義した。

「臨床心理学」でパーソナリティ理論も多く取り上げ、相談援助に活用できるような授業展開を行っている。

「心のしくみ」では、相談援助に活用できるような内容も含めるように講義を行っている。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

当該年度は、自己評価のデータとなるアンケート結果がない。また、今年度で定年退職となるため、すべては、終了となる。

学科・専攻：社会福祉学科・社会福祉専攻 職名：准教授 氏名：江原勝幸
対象科目：社会福祉原論 II（講義）

I 授業の目標・工夫など

授業の目的は「社会福祉の原理と理念、歴史、法・制度等の基礎構造について体系的に理解する」こととし、授業の到達目標を以下に設定した。

- 1) 社会福祉の原理、対象、歴史、援助技術、担い手、組織運営と経営、制度など社会福祉の基礎構造を支える理論・仕組み（原論）を説明することができる
- 2) 社会福祉について自分自身の生活から見つめ直し、自分の言葉で「社会福祉とは何か」を述べることができる。
- 3) 新聞記事・テレビ番組などを活用し、狭義の福祉に限らず、現代社会の福祉的諸問題の光と陰について考察することができる

昨年度はコロナ対応として全 15 コマが遠隔授業であったが、令和 3 年度は 1 コマの課題授業を除き、14 コマを対面で実施した。そのうち、「福祉のコトバ：人編」で 20 の保健福祉専門職の根拠法、活動内容、活動の場、資格取得方法、関連する新聞・ニュース・ドラマ・YouTubeなどを各自調べる提出課題から、実際のソーシャルワーカーの活動・支援についてより学びたいという学生からの要望を受け、1 コマを米国で SW を学び国内外で活動しているソーシャルワーカーのゲストスピーカー授業を実施した。

「福祉のコトバ：法・制度編」も実施し、各自が興味・関心のある法制度について調べる課題も課した。また、これまでの授業評価において社会問題に関するビデオ映像を用いた教材の活用は学生に高い評価を得ており、今年度は「選挙・政治、自殺、過労死、保健師、保護司、ながらスマホ」を取り上げ、その背景・要因、現状、支援、課題など社会福祉の視点で捉え、考えをまとめさせた。学生が提出した課題に対し、個々にコメントを付けて返答した。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

この科目は、社会福祉専攻学生の卒業必修科目であり、前期「社会福祉 I」で学んだ社会福祉の原理・原則、歴史、制度などの基礎構造を理解した上で、身近な現代社会の問題から広義の福祉の視点で問題の本質を理解し、必要な支援を考える発展的な内容としている。学生評価では、「I あなたの取り組み」で学科・専攻平均点を下回ったが、# 1（シラバス）、# 4（質問）、# 5（予習復習）以外では学科・専攻平均点を上回っている。

「II 授業」で学科・専攻平均点とほぼ同じであったが、4.7 点以上の項目は # 12（理解度配慮）、# 13（授業の工夫）、# 16（教員熱意）、# 17（誠実対応）、# 19（内容充実）であった。4.3 点以下は # 8 と # 10 とともにシラバス関係であり、10 月衆院選やコロナ自殺者増など話題性に基づき臨機応変に対応しているため得点が低い事が必ずしも低評価というわけではないと思われる。

自由記述からは「知らない現状を知ることができ、他の人が調べたことをまとめてくれたた

め、知識が増えた」「説明が具体的で分かりやすく、映像・新聞記事が組み合わさり理解が深まった」であった。

今後、学生が必要に応じて質問できる工夫や雰囲気づくり、コメントシートの活用と質問へのフィードバックを取り入れていきたい。

学科・専攻：社会福祉学科・社会福祉専攻 職名：准教授 氏名：中澤秀一
対象科目：社会保障論Ⅰ（講義）、社会保障論Ⅱ（講義）、社会保障論（講義）、公的扶助論（講義）、公的扶助（講義）

カリキュラムの変更により、これまで開講されていた社会福祉専攻1年「社会保障論」が、前期「社会保障論Ⅰ」と後期「社会保障論Ⅱ」とに分割された。「社会保障論Ⅱ」については、非常勤講師2名とのオムニバス形式だったため、到達目標や授業計画の調整を行う必要があった。内容がかなり異なるため、整合的になるよう今後も調整を行っていく必要があると感じている。

2021年度は対面授業を基本としつつも、前年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症に対応した遠隔授業も行うハイブリット授業が多かった。しかしながら、これまでと同様にパワーポイント資料を利用しており、授業の内容自体を大きく変えることはなかった。DVDの映像資料はZoomで配信することは難しかったため、動画サイトで代替となる内容の動画を探して、そのURLを提示することで対応した。また、YouTubeの限定配信で授業を昨年度と同様に行った。これまでは実習期間中は休講にしていたのが、動画配信にすることで継続して授業を実施することができたので、学生の負担は軽くなった。

これらの対応に対する学生の評価は、アンケートの自由記述欄によると、「**遠隔でも対面でも対応できるようにしてくれたこと（がよかった）**」「**遠隔が動画配信だったため（繰り返し視聴できて）分かりやすかった**」などのコメントがみられた（社会福祉専攻1年「社会保障論Ⅰ」および介護福祉専攻2年「公的扶助」自由記述欄より）。ハイブリット授業は、通常よりも準備に時間がかかるうえに、教室に居る学生とネットで閲覧している学生の双方に気を付ける必要があり、双方を把握する難しさがあった。とくに、ネットで閲覧している場合には、学生の様子を把握することが難しく、なかなか理解度を把握できていなかった。したがって、授業の終わりに質問を受け付ける時間を設けた。アンケートの自由記述欄によると、「**質問もしやすく良かったです**」とのコメントがみられた（社会福祉専攻1年「社会保障論Ⅰ」自由記述欄より）。

授業評価アンケートの結果では、「**授業はシラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた**」については、社会保障論Ⅰ（社会福祉専攻1年）で**4.88**（4.72）で、2020年よりも平均点が上昇した（括弧内は昨年度の平均点）。また、教え方については、「**学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた**（説明の仕方、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など）」については、社会保障論Ⅰ（社会福祉専攻1年）で**4.94**（4.83）と、こちらも平均点が伸びている。試行錯誤が効果を表したのかもしれない。引き続き、学科・専攻平均点を上回れるよう、創意工夫を重ねていきたい。

「Ⅲ 遠隔授業の方法について」では、どの科目でも学科・専攻平均点を上回っていた。今後も学生の目線に立ち、誰ひとり取り残さないような授業展開をめざしていきたい。

学科名：社会福祉学科 職名：准教授 氏名：松平千佳

対象科目 ソーシャルワーク論Ⅱ ソーシャルワーク論Ⅲ ソーシャルワーク演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ 障害児保育 子育て支援 ソーシャルワーク実習指導 ソーシャルワーク実習 学科共通科目「ホスピタル・プレイⅠ(入門編)」「ホスピタル・プレイⅡ(障害児編) ホスピタル・プレイ・スペシャリスト養成講座

I. 授業の目標・工夫など

コロナ禍で対面授業に制限がかかり、ソーシャルワーク演習をはじめとするソーシャルワーク系の科目を教えることが非常に難しいと感じた。また、現2年生の特徴だったのかもしれないが、学生にも高校時代に制限を多くかけられた影響からか、コミュニケーションが特に地震のない学生が多く、対人援助者としてのソーシャルワークを教えるにあたり、例年以上の注意深さが必要であった。

ソーシャルワークで教えるテーマが、いじめや虐待、DVや貧困など、学生自身が直面している課題を扱うこと、また、自己覚知という作業が要所に求められること等、ソーシャルワークの学びは常に自分と向き合う必要のある学びであるが、なかなかそのスタートに立つことすらできない幼さを感じた。この原因を十分に分析することはまだできないが、1つの特徴として報告するとともに、結果、これまでよりも教える内容を精査し、グループワークなどのペースを落として教えることが要求された1年であった。

学生たちには、人々が出会い、人間関係を積み上げていく感覚を取り戻すことも必要だったように感じている。

演習の中心的課題は「人が人と出会い信頼の中でよりよく生きる方法を自ら獲得する」ということだが、リモートではなやほりソーシャルワーク系の科目を教えることは難しいと改めて実感した1年であった。

昨年に引き続き、教員の連携によって何とか実習系の科目も進めることができた。実習先の確保は大きな課題であったが、就職状況にも影響することがわかり、実習先も実習生に門を開けている印象があった。しかし、実習巡回指導については電話による巡回を依頼する施設もまだちらほらあり、コロナの影響がまだ続くことを予想した。

II. 授業の自己点検・自己評価

報告者は2年生科目を多く担当している。1年次にソーシャルワークマインドを十分伸ばしてきていないためなのか、手ごたえがあまりかじられない講義になったが、学生に気づきやモチベーションをある程度保つことのできた評価が返ってきていることに満足している。自由記述には、自分と向き合う大切さを学んだなど、コロナによって作られた静かな時間を有効に使った学生の記述もあった。

変わらず「しんどいけど楽しい授業だった」との感想が聞けたことは大変うれしい。

毎年書くことだが、本学の学生はさまざまな生活課題を抱えながらも懸命に生きている

学生が多い。特に、今年度は貧困問題を抱えている学生が多くいた。

それらの学生にとって社会福祉を学ぶことは単なる知識や技術の獲得にとどまらない。自分のおかれている環境や家族を俯瞰してみることのできる機会を与えることにつながる。

多分、大学時代が最後の機会となる可能性がある。

冷静に社会や家族の問題をとらえることができるようになると、生きる力が湧いてくると思うので、細心の注意を払いながらも現代の家族が抱える問題を学びの中に取り上げていきたい。

学科・専攻：社会福祉学科社会福祉専攻 職名：講師 氏名：佐々木将芳
対象科目：障がい児保育Ⅰ（演習）、ソーシャルワーク論Ⅳ（講義）

講義におけるねらいと工夫

障がい児保育Ⅰは1年生が受講する科目であり、保育やソーシャルワークの実習に臨む前に、障害についての基本的な理解や具体的な援助内容を理解することを目的としている。そして、「障害」についての基礎的知識を習得する過程で、これまで学生自身が抱いていたであろう「障害」に対するイメージを再構成することも意図している。

ソーシャルワーク論Ⅳは2年次（後期）配当のため、ソーシャルワーク実習を終えた学生に対してソーシャルワークの発展的理解と価値・技術の再確認、そして実践者とし現場に向かうための心構えを持つという位置づけで講義を行っている。

講義についての自己評価と今後の改善・工夫

それぞれの講義ではできる限り具体的な事例や社会問題を提示し、学生にとって各回の内容をイメージできるように心がけた。特に障がい児保育は、1年生にとって障害などの言葉や専門的知識の内容に初めて触れるケースも考えられるため、より丁寧に語句の説明なども行った。また、障害に対しての正しい理解と援助を行う上での戸惑いや不安をできるだけ軽減できよう、具体性をもった講義を心掛けた。

ソーシャルワーク論Ⅳは、学生がこれまでに終えた各実習での経験も可能な限り振り返られるよう心がけ、学生自身の経験や体験と理論が結びつけられるように講義を進行した。それらを踏まえ評価を振り返ると、それぞれの各科目でその意図を理解されたように感じる。学生にとって、「この分野に対する興味・関心増した」、「授業に意欲を持って受講した」などの項目が概ね「そう思う」「ややそう思う」との回答であった。しかし、専攻平均から低い項目や標準偏差の値が大きい項目が見られたため、まだ改善の余地は多分に残されていると思う。下記、「学生に期待すること」にも関連することであるが、学生が教員へ質問しやすい雰囲気をどう作るのか、講義を受講するに当たり事前・事後学習を積極的に行う動機付けを工夫する必要性を感じている。

その上で、学生自身の体験や興味に引き寄せられるような指導方法を考えていきたい

学生に期待すること

専攻平均でも同様の傾向が見られることだが、疑問点などについて質問する学生の少なさは課題として感じられる。講義の中で必ずしも受講者全員の理解度に合わせた進行ができないケースもある中で、学生自身が主体的に自らの進行業況を理解しそれを補うような姿勢を期待したい。少人数教育を実施しているからこそ、受け身ではなく積極的な姿勢をもつきっかけにしていきたい。

社会福祉学科介護福祉専攻 教授 高木 剛

介護過程Ⅰ（講義）、認知症の理解Ⅱ（講義）、介護福祉論Ⅱ（講義）、発展介護技術（講義・演習）、発展介護過程（講義）

I. 授業の目標・工夫など

1) 介護過程Ⅰ

授業の目標は、介護過程の目的・意義、展開プロセス、チームアプローチ等について理解するとともに、これらを他者に説明できることである。学生の理解を高めるために、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、身の回りの出来事を題材とした事例問題の作成、練習問題の作成等の工夫をした。

2) 認知症の理解Ⅱ

授業の目標は、認知症の種類やその代表的な症状、中核症状と行動・心理症状（BPSD）、認知症の人のケアの基本的原則等について理解するとともに、これらを他者に説明できることである。学生の理解を高めるために、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、視聴覚教材（DVD等）の活用、最近の新聞記事の紹介等の工夫をした。

3) 介護福祉論Ⅱ

授業の目標は、社会福祉士及び介護福祉士法の概要、職業倫理、リスクマネジメントなどについて理解するとともに、これらを他者に説明できることである。授業では、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、要点をまとめたレジュメのほか、関連資料の配布、最近の新聞記事の紹介をする等の工夫をした。

4) 発展介護技術

授業の目標は、介護技術の目的と介助の手順を理解し、その留意点と根拠を説明できることや、介護技術に必要な観察、アセスメントを実践できること等である。授業では、担当教員ごとに少人数のグループを編成し、介護実習で取り組んだ課題を題材としてグループごとに介護技術の観点からよりよい方法・手順等について検討した。また、学修効果を高めるために発表会（動画、パワーポイント等を使用）を開催し、意見交換ができるように工夫をした。

5) 発展介護過程

授業の目標は、介護実習における介護過程の実践的展開を目指し、これまでに修得した知識・技能を活用すること、また、チームの一員として介護過程の展開に係る意見交換等を行えること等である。学生の介護過程展開の力量を高めるために、担当教員ごとに少人数のグループを編成し、ケアカンファレンスを開催するなどしてグループ内で意見交換ができるように工夫した。

II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

1) 介護過程 I

授業評価アンケートにおける「II 授業について」の平均点は、「4.74」であった。また、学生のコメントとして、「生徒の意見をしっかり聞いてくれた」、「説明が分かりやすかった」等のポジティブな記載があった。

授業の工夫等により概ね学生の満足感を得ることができたと考える。

2) 認知症の理解 II

授業評価アンケートにおける「II 授業について」の平均点は、「4.69」であった。また、学生のコメントとして、「問題を出して理解しているか確認してくれた」、「認知症の症状やケア方法を資料や DVD で解説してくれて分かりやすかった」等のポジティブな記載があった反面、「授業に出席したがユニパに反映されていない」とのシステム上の問題を指摘する記載もあった。なお、授業の出欠についてはユニパとは別に担当教員が直接確認しているため、必要に応じてデータを修正している。

授業の工夫等により概ね学生の満足感を得ることができたと考える。

3) 介護福祉論 II

授業評価アンケートにおける「II 授業について」の平均点は、「4.59」であった。また、学生のコメントとして、「最後の授業で日本と海外の介護に触れていてよかった」、「レジュメが見やすい」というポジティブな記載があった反面、「授業レジュメが文字と文字の間の行間が狭くて、メモが取りにくかった」との記載もあった。

授業の工夫等により概ね学生の満足感を得ることができたと考えるが、レジュメの作成にあたり、行間を確保してメモを取りやすくする等の配慮をしたい。

4) 発展介護技術

授業評価アンケートにおける「II 授業について」の平均点は、「4.48」であった。また、学生のコメントとして、「実際に利用者の情報を使用し、どのような介助・声掛けを行うのか仲間同士で考えることで、介護の技術だけでなく、チームワークについても学ぶことが出来た」というポジティブな記載があった。

授業の工夫等により概ね学生の満足感を得ることができたと考える。

5) 発展介護過程

授業評価アンケートにおける「II 授業について」の平均点は、「4.65」であった。また、学生のコメントとして、「介護過程について理解することが出来た」というポジティブな記載があった反面、「日程が短い」との記載もあった。

授業の工夫等により概ね学生の満足感を得ることができたと考えるが、授業の日程については学生の学習効果を高められるように可能な限り調整したい。

学科：社会福祉学科・介護福祉専攻 職名：准教授 氏名：奥田都子
対象科目：家族福祉論（講義）、生活支援技術Ⅰ（演習）、介護レクリエーションⅠ（演習）、
介護実習指導Ⅱ（演習）、子ども家庭支援論（講義）

I 授業の目標・工夫など

令和3年度は、新型コロナウイルス感染症への対応として、オンラインと対面授業の混合方式を充実させること、ワクチン接種と学外実習日程の重複・実習期間延長などの調整と個別対応が課題となった。

「介護実習指導Ⅱ」の個別指導は、従来グループ指導方式だったが、コロナ禍により遠隔での個別対応となり、学生の課題指導や報告書作成などは、教員とのメールの往復によって進める方式をとった。

「介護レクリエーションⅠ」はすべて対面での授業を実施した。「家族福祉論」「生活支援技術Ⅰ」は対面授業としたが、感染レベル上昇のため、最終回2コマは、急遽zoomによるグループワーク、ロールプレイとなり、最終局面での授業方式変更に困惑する学生も多く、授業評価には負に働いた。

後期は「子ども家庭支援論」を対面授業で始め、実習期間の2回分の補講については課題提示型遠隔授業で対応した。この科目は、保育現場を想定した事例において、家庭支援の実践力向上をはかるため、感染防止対策を十分にとったうえで、保護者対応失敗事例のディスカッションや、改善に向けてのロールプレイを重ねることにより学習効果をねらった。また、遠隔授業では、子育て支援関連法制度の理解を深める目的で、制度の内容をカルタの読み札として作成することを課題とし、対戦形式で年始の授業に活用した。読み札作成過程において、制度の特色や類似の法律との差異についての理解を深め、勉強していないと判断しにくい札作りを工夫することによって主体的に学べること、対戦方式で学習成果を自分で測れることなど、学生の意欲喚起と授業効果の向上をねらった。

II アンケート結果に対する自己評価と今後の改善・工夫

アンケートの回答がweb方式になった結果、回答数が半減し、自由記述も激減したため、コロナ前に比べて回答結果の信頼性を判断しにくくなった。

「介護レクリエーションⅠ」(4.74)や「生活支援技術Ⅰ」(4.51)は例年並みだが、ロールプレイやグループワークを特色とする「家族福祉論」では4.8➡4.24、「子ども家庭支援論」では4.58➡4.2へと評価が低下した。

密な接触を避けるためにグループワークを最小限にとどめ、感染拡大期はzoomでのロールプレイに変更したことから、対面ならではの授業効果を上げにくかったと考えている。

自由記述では、「グループ活動でロールプレイや事例検討を行うなど実践的だったため、より知識が身についた」「ロールプレイを多く用いていたため、どのように保護者に対応していく必要があるのかだけでなく、保護者の気持ちになって考えることができた」等、グルー

プワークやロールプレイへの支持が高い一方で、改善点として「zoomでのロールプレイはとてもやりにくかった」との意見も寄せられた。

今後は、感染対策をとりつつ、対面でのグループワークやロールプレイの機会確保の工夫が必要である。逆に、コロナ禍で授業評価が高くなったの「介護実習指導Ⅱ」では、対面指導を避け、zoom・メールによる個別指導で課題や報告書の作成をサポートしたが、1対1の個別対応に学生の評価は高まり、「丁寧に添削して下さった」「先生のサポートが厚く助かった」などの評価が寄せられた。指導の手厚さが学生をスポイルしない程度に個別対応に努め、学生の自主自立を支援していく必要がある。

全体の総括として、グループワークやロールプレイなど学生が自ら展開していく力を活用した授業形式は、コロナ禍においても、学びの意欲を喚起し、授業への関心・集中を高めることに効果があった。また、個別対応による学生指導の効果も顕著であったため、今後も、学生とのキャッチボールを心がけ、意欲を引き出す工夫を続けたい。そして、遠隔指導における意思疎通や効果的なプレゼンテーション方法において、新たな工夫を模索し、学生が積極的に取り組めるような授業方式を探っていきたいと考える。

学科・専攻：社会福祉学科介護福祉専攻 職名：准教授 氏名：木林身江子
対象科目：身体のおくみⅠ（講義）、介護過程Ⅳ（講義）、医療的ケアⅠ（講義）、
医療的ケアⅡ（講義・演習）、医療的ケアⅢ（講義・演習）

「身体のおくみⅠ」は、対面授業を実施しテキストに沿って授業を展開した。必要に応じて別途資料で補足し、理解を伴った習得につながるよう努めた。また、国家試験を念頭におき、特に重要な部分はミニテストを実施することで記憶の定着を図った。授業の内容や量・範囲、課題の質・量については、学生の理解度に応じており概ね適切であったと評価でき、全体的には学科・専攻の平均点を上回り高評価であった。しかし、理解を深める学生自身の努力という点では評価が低かったことから、授業への関心を高める工夫をしながら、予習復習行動につながるサポートをしていきたいと考える。

「介護過程Ⅳ」は、心臓、呼吸器、腎臓、膀胱・直腸、肝機能障害等、内部障害のある人について、医学的知識に基づいた分析により適切な介護・生活支援計画を立案するという介護過程の展開能力を養うことを目指している。

令和3年度は、対面と遠隔を組み合わせた授業形態とした。対面授業で使用する資料については更なる改善に努めた。1年次の「身体のおくみ」の復習を含め、端的な文章、穴埋め形式、図表やイラストを盛り込んで視覚的にも分かりやすく理解を深められるような資料に改良した。また、遠隔授業では、対面授業の学習内容を復習することで回答できる課題を提示した。学生の取り組み内容から、基本的な知識の習得にはつながったと評価できた。全体的には学科・専攻平均点を上回り高評価であったが、毎回の授業の量と範囲の適切性についてはやや評価が低かったことから、内容を精査しポイントが伝わる授業を意識したいと思う。

「医療的ケアⅠ」は、介護現場において医療従事者と連携しながら、経管栄養や痰の吸引などの医療的ケアを安全に提供できるよう、基本的な考え方や知識および実施手順について理解することを目的としている。

令和3年度は全回遠隔授業として実施した。主に、テキストの各章に提示されている設問に取り組むことで、基本的な知識の習得を目指した。

提出されたレポートの内容からは、概ね適切な理解がなされたと評価することができた。最終講にはゲストスピーカーによる講義を実施した。ズームでの講義であったが、医療・介護連携、多職種協働等について考える良い機会になったと思われる。次年度以降も、現場での取り組みについて授業に含めていきたい。

全体的に評価は学科平均を少し上回る程度であったが、介護福祉士として必要な視点・思考・対応を考えさせるような機会が不足していたことから、映像視聴やグループワークなどを取り入れるなど工夫していきたいと考える。

「医療的ケアⅡ・Ⅲ」は、講義部分は遠隔授業として課題に取り組んでもらい、後半は対面形式で演習を実施した。課題学習は、量・質の適切性および難易度について学生の評価が

低かったことから、学生の理解度に配慮した内容・進度について改善を図っていきたい。一方、技術演習については高い評価であった。

用手微振動やポジショニングは、感染予防のため昨年度に引き続き取り止めることとし、経管栄養、喀痰吸引に絞り、1グループあたりの学生数を少なくしてスケジュールを組み実施した。

学生たちは、感染予防対策をはかりながら落ち着いた環境のなかで、非常に能率的に集中して練習に励み、技術試験にも意欲的に取り組むことができていた。

次年度以降も、グループダイナミクスを発揮してコロナ禍でも効率よく学習が深められるよう、授業内容・方法の工夫に努めていきたいと考える。

学科・専攻：社会福祉学科（介護福祉専攻） 職名：准教授 氏名：鈴木俊文
対象科目：福祉経営とリーダーシップ（講義）、介護過程Ⅱ（演習）、介護実習指導ⅠⅡ、介護実習ⅠB、社会福祉演習

I 授業の目標・工夫した点

10月着任により、当該年度は後期開講科目のみの担当であった。

筆者の主担当科目である「福祉経営とリーダーシップ」は、本学独自科目として設置・開講された科目であるが、介護福祉士養成科目カリキュラム改正によって新たに「チームマネジメント」学習の対象科目として教育目標や内容の再考を行った。

具体的には、カリキュラム上教育に含むべき事項である「組織論」と「リーダーシップ論」を学ぶ講義系科目で整えることに加え、教育方法として研究成果をふまえた（実践事例を教材にした）ケースメソッドを導入し、チームワークの基礎とマネジメント理論を実践的に学習できるよう工夫した。

本科目は、例年介護事業における組織体制の理解やキャリア構造、リーダーとしての役割や業務内容のイメージが得にくいという学生の声が多く挙げられる点が課題であった。この点において、当該年度は現場職員を招いて、事業所事例を取り上げた実践的理解と、実習指導者等学生自身がかかわりのある役割を事例としたキャリアパスモデルを例示した学習を行うなど、介護事業における組織体制やキャリア構造、リーダー的役割の具体業務などの学習が進められるよう工夫した。

また、筆者が担当する社会福祉専攻（社会福祉演習）等の授業（ゼミ）は、筆者ゼミが主軸とする介護事業に関わる福祉専門職や行政職の活動のほか、当該年度は介護をとりまく周辺環境への関心が高い受講生が集まったため、介護事業の展開、福祉行政の活動に限らず、NPO法人が取り組む社会活動や学生のインターンシップの動向等を捉える学習、フィールドワークを行った。

これを機会として、東京大学や早稲田大学、立命館大学、日本福祉大学のゼミ学生との交流が生まれ、オンラインによる合同ゼミ開催（福祉活動のディスカッション）を実施できるなど、他大学の学生との交流をはかることができた点が新たな取り組みであり、成果となった。

II 自己評価と今後の課題

各評価項目の全体的な評価は過去実績と類似しているものの、例年、比較的低水準であった福祉経営とリーダーシップ科目の当該科目平均点が、学科・専攻平均点を上回る結果として得られた。

当該科目の自由記述には、「内容がわかりやすく学生が理解できるような進め方になっていた」「現場でリーダーとして働くための必要な知識が身についた」「今後のキャリアアップのための勉強になった」という記述があり、いずれも当該科目がねらいとした点を、学生の声として得ることができた点は評価できる。

一方で、課題量については「適切ではない」という声もあげられた。

当該年度、本授業では、シラバスを大幅に見直したため、学生の学習理解度を確認、評価する目的での課題量を例年よりあげたことも要因のひとつと考えられる。この点を今後の検討課題として取り組みたい。

学科：社会福祉学科 職名：講師 氏名：濱口晋

対象科目：コミュニケーションⅠ（講義）、コミュニケーションⅡ（講義）、介護過程Ⅰ（演習）、介護過程Ⅱ（演習）

介護実習指導Ⅰ（演習）、介護福祉演習（演習）

I 授業の目標・工夫など

「コミュニケーションⅠⅡ」及び「介護過程ⅠⅡ」授業の目的は以下の通りである。「コミュニケーションⅠ」で介護におけるコミュニケーションの基本を学習する。「コミュニケーションⅡ」ではコミュニケーション障害がある利用者とのコミュニケーションの技法の基本を身につける。「介護過程ⅠⅡ」では、聴覚・言語障害のある利用者への介護過程の展開方法について説明できる。これら3科目を、コミュニケーション技術の基礎・応用・発展とそれぞれ位置づけて、段階的に授業を計画し実施した。

特別養護老人ホーム等高齢者施設や障害者支援施設等障害者施設等で介護福祉実践する上で、役立つように、失語症等の言語障害や加齢性難聴等の聴覚障害について重点的に取り上げた。工夫した点は、新型コロナウイルス感染症予防にも努めながら、対面授業をできるだけ実施し、演習を取り入れるようにした。演習時には、マスク着用とフェイスシールドを使用したため、マスクやフェイスシールド使用時のコミュニケーション技術を考える演習を行うことができた。多種多様なコミュニケーション障害を理解し、障害に応じたコミュニケーションの技法を実際にわかることができるよう、対面授業の中でDVD等の視聴覚教材を使用した。また、単に視聴するだけでなく、障害を持つ利用者の状態を各自が考え、判断し、適切なコミュニケーション技法を選択し、実施していくという演習を行った。さらに、読話で実際に言葉を読み取る演習を行った。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「コミュニケーションⅠ・Ⅱ」について（II 授業について 平均昨年 3.98→4.55 範囲 4.24～4.71）「コミュニケーションⅠ」について 「(10) 授業はシラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた」は、一昨年度類似した質問項目は3.94であったが、昨年度と今年度と4.24と評価が若干改善していた。「(12) 教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」・「(13) 教員は、学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた」・「(14) 教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」の項目は、いずれも4.65以上と評価が特に高かった。一方で『説明が長く、わかりづらかった』との意見もあった。過去にも、『パワーポイントのスライドが速い』や『話す口調やタイミングによりわかりにくい』などの意見もあり、今後もわかりやすく話すよう心掛けたい。「コミュニケーションⅡ」についても、昨年の「コミュニケーションⅡ」に比べ、低下した。（II 授業について 平

均昨年 4.27→4.52)。今年度も授業内容の構成や流れが学ぶ側にとって、適切なものとなるように、授業を計画的に展開し、学習者の理解度に応じて、柔軟に修正できるように改善していきたい。『先生に質問がしやすかった』との意見もあり、一人ひとりの学生に、より丁寧に対応していきたい。

(Ⅲ 遠隔授業の方法について 平均昨年 4.36→4.53 範囲 4.47～4.59)

「(21) 遠隔授業の方法は、授業内容の理解の上で適切だった」「(22) 遠隔授業は、学生が興味を持って取り組めるよう工夫がされていた」の項目の評価は高かったが、『もっと対面で学びたかった』と意見もあった。今後も授業内容の構成や流れが学ぶ側にとって、適切なものとなるように、授業を計画的に展開し、学習者の理解度に応じて、柔軟に修正できるように改善していきたい。一人ひとりの学生により丁寧に対応していきたい。

「介護過程 C」については、「コミュニケーションⅡ」を応用発展した演習を例年実施していたが、対面授業が1コマで、残りの4コマは遠隔授業で実施した。そのため、遠隔授業への対応が十分にできなかった。(令和3年度終了科目)

「介護過程Ⅱ」については、(Ⅱ 授業について 平均 4.49 範囲 4.30～4.70) であり、複数教員のオムニバス形式の授業でもあるため、今後他の教員と一緒に内容について見直しをしていきたい。

「介護実習指導Ⅰ」については、評価全体において、4.50～4.80 昨年度 4.43～4.71 に比べて若干改善した。コロナ禍であったが、実習に関する科目であったため、全体指導や個別指導ともに、できるだけ多く対面授業で実施した。今後も実習指導のため、介護実習や実習施設のことが具体的にイメージできるような、わかりやすい授業を心がけていきたい。

「介護福祉演習」については、評価全体において、4.47～4.80、昨年度 4.57～4.81、評価は低下しなかった。ユニバーサルパスポートや ZOOM 等積極的に活用した結果、学生の自主勉強を促し、効果的に活用できることもわかった。その結果、3年連続介護福祉士国家試験合格率 100%を達成し、また、令和2年度から公表された養成施設別合格率も合格者数で2年連続の全国3番目の結果を収めることができた。今後も学生が自主的に継続して勉強できるような工夫を考え、実施していきたい。

学科・専攻：社会福祉学科介護福祉専攻 職名：助教 氏名：大石桂子

対象科目：基礎介護技術（演習）、応用介護技術（演習）、発展介護技術（演習）、認知症の理解Ⅰ（講義）、介護過程Ⅱ（講義）、介護過程Ⅲ（講義）、発展介護過程（演習）、介護実習指導Ⅰ（演習）、介護実習指導Ⅱ（演習）

基礎介護技術、応用介護技術では、学生からは積極的に参加ができた、わからないことはその都度教員に質問でき、技術の習得ができたという意見が多かった。この2科目では、従来から使用している技術の手順書に加え、年度ごとの学生の様子・技術の習得状況などに合わせて新たに教材を作成し、柔軟に授業を実施している。演習中は、教員からも学生に対して積極的に声をかけるように努めている。

発展介護技術は、学生とのグループワークの時間が多いが、担当学生の自主性を高めるよう、教員から指示を出すことを控え、学生個々の取り組みを支援するよう努めた。結果、事例検討では学生自身で役割分担を決め、積極的なディスカッションが行われ、積極的な取り組みができていた。

認知症の理解Ⅰについては、学生から積極的な質問ができたという項目が少し低かった。質疑応答を授業内で投げかけるも、積極的な発言は聞かれないため、振り返りシート、ユニパを利用して、質問を含むコメントを求めるなど、学生の意見や質問を聞く機会を設けたが、これだけでは不十分であったと感じているため、改善したい。

介護過程Ⅱ、介護過程Ⅲ、発展介護過程では、視覚教材、グループワークなどを用いて授業を実施した。オムニバス形式の授業のため、個人の授業評価についてはコメントでも触れられていなかった。今後、最終講義の回に、授業の振り返りができる時間や方法を検討し、学生の学びの到達度、授業への意見等を求めるようにしたい。

学科・専攻：こども学科 職名：教授 氏名：小林佐知子

対象科目：①発達と老化Ⅰ（講義）：介護福祉専攻1年

②教育心理学（講義）：こども学科専攻2年

1. 授業についての自己評価

評価を受けたどちらの授業も対面授業を中心に、一部を遠隔授業（オンデマンド）で実施した。遠隔授業の取り組み方については、対面授業時に具体的に説明したが、特に問題はみられなかった。

①「発達と老化Ⅰ」

授業に関する評価は学科・専攻平均点を若干上回っており、“毎回の授業の量と範囲の適切さ”や“授業方法の工夫”“学生の主体的な学びのための工夫”“学生への対応”の項目で比較的高い評価を得た。他方、学生自身の取り組みに関する評価は学科・専攻平均点を若干下回っており、特に“予習復習”は低かった。全体的に大きな改善点はないと感じられたが、予習復習を必要とする授業になっていない点については今後の課題である。

②「教育心理学」

授業に関する評価、学生自身の取り組みに関する評価ともに学科平均点を若干下回る結果であった。授業に関しては、“シラバスの記載内容”と“シラバスに沿った授業展開”、“成績評価の方法”項目が低かった。評価方法の明確化が今後の課題である。学生自身の取り組みに関する評価では、“疑問点を教員に質問した”“予習復習”項目が少し低かったこと、“この分野に関する興味・関心が増した”が少し高かった。自由記述を見ると、“説明がわかりやすい”“具体例が多くてわかりやすい”“パワーポイントがわかりやすい”などわかりやすさに関する肯定的な意見が散見された。

2. 今後の改善・工夫

授業外の課題がほとんど設定されていないことが、予習復習の機会の少なさに関連したかもしれない。授業外課題をどうするか今後改善する必要がある。成績の評価方法が少し曖昧であったため、シラバスへの表記や学生への説明を明確化していきたい。

3. 学生への要望等

授業態度が良く、特に2年生はグループワークに積極的に協力してくれたので、授業全体の活性度が上がったように感じた。

要望としては、授業中にスマホをこっそり見るのは止めてほしい。気がついたときに注意したら、以後なくなったので、初回に周知徹底すればよかったかもしれない。

学科：こども学科 職名：教授 氏名：永倉みゆき

個人科目：教育原理（講義）教育課程・保育計画論（講義）幼児教育者論（講義）

保育内容（言葉）（演習） 保育内容（総論）（演習）

共同実施科目：教育実習指導（共同）教職実践演習（共同）卒業研究（共同）

本年度は、遠隔授業の2年目であった。特に1年生は、最初からリモートと対面の混合授業となり大変だったと思うが、前向きな態度で取り組んでくれたことに感謝したい。中には、満員電車に乗るのが怖いという学生がいたため、その場合の遅刻については配慮をした。しかし、だからといって遠隔授業にすると、自宅で受講しにくい学生もいたり、実施ができない内容（著作権の問題などで）もあつたりと難しかった。

1年生の科目4つは、昨年同様ほぼ対面でいったため、Ⅲの解答は自分の科目にはあまり当てはまらない。また全体的に4の「質問ができた」が低かったが、質問については、コメントシートを利用して疑問に答えるようにした。また、5「予習をした」については、高校時のように教科書に沿った「予習」ではないため、私の科目では予習がしにくく、むしろ復習をして欲しいと考える。

課題に取り組む形で予習となっていることもある。また、どの教科でも自分で調べ、考え、発表する、または意見交換する形を取り入れたことで、8割強の学生が「主体的に取り組めた」と回答していたのは有難いことだった。

2年生の科目「保育・教職実践演習」「卒業研究」については、いずれも評価が平均よりはかなり高く、これはいずれも少人数での対面実施科目であり、グループワークやフィールドワークがあったことの影響が大きく、コメントにもそれらについての意見が多く見られた。教職実践演習では「グループごとの発表」の方がよかったという意見があり、令和4年度は、可能なら対面でグループ発表のような形を計画したい。

各科目について言えば、「保育内容総論」では、進め方が丁寧だったので楽しめた、ビデオを使った解説がわかりやすかったという意見があり、次年度に活かしたい。対面で他の学生の意見が聞ける機会があったことも良かったようであった。

「幼児教育者論」もまた、資料やテキスト、動画などを織り交ぜたことがわかりやすかったという意見につながったようであった。

「教育原理」に関しては、例年同様、図書館の本を使って調べ、発表するという形式をとったが、他の学生の発表を聞くことができよかったという意見があった。発表が2回にまたがってしまった時は分かりにくかったという意見もあり、時間配分に気を付けたい。

「教育課程・保育計画論」は指導案の書き方を教える授業ではなく、部分的に指導案を書きながら、保育計画の意義を教える授業であり、子どもの実態を知らない1年生であれば指導案を書くのが難しいのは仕方ないことである。

毎年限界を感じながら、できる範囲で伝え、2年次で実習に行つて実際に書きながら理解し

てくれればよいと思っている。

「保育内容指導法（言葉）」では、「事例を通した学びが役立った」「絵本についての授業が興味深かった」というコメントがあり、次年度も引き続き力を入れていきたい。

授業が徐々に本来の形に戻りつつあるが、できる限り満足の行く授業になるよう工夫していきたいと思う。

学科：こども学科 職名：准教授 氏名：副島里美

対象科目：子どもと環境（演習）・特別な教育的ニーズの理解と支援（演習）

【授業についての自己評価と今後の改善・工夫】

授業の工夫・授業の現状

どの授業も視覚的に理解しやすいように、パワーポイントで教科書の内容をわかりやすくまとめ、動画に編集して提示した。授業では、次回の講義場所を伝え、事前学習で読んでくるように伝えているが、その学習が成立しておらず、事前の知識がないために、戸惑いを感じ、授業を把握しきれなかった学生がいたと思われる。

グループ活動に関しては、相当と思われる課題を出し、それをシェアすることで意見の多様性を見出すことを目標にしたが、“自分でやること”が精一杯になることがあった。また、グループでの課題を出したときは、課題をこなす量に学生間の格差が生じてしまい、不満を持つ学生がいた。

今後に向けての改善

- ・なるべく教科書に沿って話を進め、教科書のどこに書かれてあることについて説明しているのかを、明確になるように進行する。
- ・なぜ今この内容をやらねばならないか、という理由を明確に示していくことで、将来につながる感覚が持てるようにする。
- ・学生の質問に対してさらに丁寧な返答を心がける。
- ・学生に出す課題の量を再考し、厳選していく。
- ・課題の提出期限などを更に明確に提示していく。

学生に期待すること

本授業で行っている内容は、どれも実際の現場で実践していくことが望まれる内容である。しかし、実際に現場に入ってしまうと日々の業務に忙殺され自分を省みたり、保育の意義について考える時間は限られてくる。多忙な毎日であると思うが、自分を見つめなおす、保育の根本を考える（書物を読むなど）の機会を是非取っていただきたい。

人（社会）の中には色々な意見がある。今は同じような価値観を持った集団にいるためにあまり感じないと思うが、社会の中では自分の意に反して動くことも多い。そしてそれが日常である。多くの意見を受け止めることができる寛容な心を持ってほしい。また、学生自身が多くの知識を“主体的”に臨んでいく態度で、受講してほしいと願います。

学科・専攻：こども学科 職名：准教授 氏名：藤田雅也

対象科目：保育内容の理解と方法Ⅰ（造形）（演習）、保育内容の理解と方法Ⅱ（造形）（演習）、

保育内容指導法（表現）（演習）、子どもの表現Ⅱ（演習）、介護レクリエーションⅢ（演習）

Ⅰ．授業の目標・工夫

それぞれの授業の目標は以下の通りである。いずれの授業においても実践と理論の往還を通して、子供の成長や発達についての理解を深め、適切な指導と援助ができる、感性豊かな人材の育成を目指している。

○保育内容の理解と方法Ⅰ（造形）

子どもの造形活動を、日々の生活や遊びとのつながりの中で総合的に捉え、その活動を生み出す環境づくりや援助の在り方について、発達過程と照らし合わせながら理解を深める。

○保育内容の理解と方法Ⅱ（造形）

様々な素材や用具を活用した表現技法を体験的に学ぶ演習を通して子どもの造形活動を追体験し、指導を行う上での基礎となる造形能力を高める。

○保育内容指導法（表現）

保育の内容としての5領域を関連させ、総合的に保育を展開するための表現領域の知識、技術、判断力、指導力を修得し、子ども理解に基づいた保育としての表現について学ぶ。

○子どもの表現Ⅱ

子どもの造形活動に関する知識や技能を高める。また、美しいものに目を向けたり、様々な出来事や表現に感動したりすることができる豊かな感性を身につけ、造形表現能力や実践的指導力を高める。

○介護レクリエーションⅢ

造形表現活動（描くこと・つくること・みること）を活かした介護レクリエーションを実践するための知識と技能を習得する。また、要介護者の立場に立った文化的な支援を行うことのできる力を養う。

Ⅱ．授業についての自己評価と今後の改善・工夫

○保育内容の理解と方法Ⅰ（造形）

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。「Ⅱ 授業について」の項目については、当科目平均点が4.84と高い数値結果であった。また、「Ⅲ 遠隔授業の方法について」の項目についても、「遠隔授業の方法は、授業内容の理解の上で適切だった」（当科目

平均点：4.94) など、肯定的な回答が多かった。授業では、子どもの造形活動を育むための環境づくりや援助について体験的に学ぶ時間を大切にされた。自由記述には、「楽しく主体的に学ぶことができてよかった」「授業や課題がそのまま保育者になったときに生きるのも、とてもためになった」「グループワークなどで話し合いながら行えたので、周りとの意見交換をしながら楽しく参加できた」などが挙げられた。

○保育内容の理解と方法Ⅱ（造形）

「Ⅱ 授業について」の項目については、当科目平均点が 4.78 と高い数値結果であった。授業では、保育現場における実践事例を踏まえながら、様々な素材や用具を活用した表現活動について理論と実践を往還させた展開を心掛けた。自由記述には、「実践活動が多く、楽しく取り組むことができた」「他の学生の作品を鑑賞することで自分にはないアイデアを知ることができた」などがあつた。

○保育内容指導法（表現）

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。「Ⅱ 授業について」の項目については当科目平均点が 4.70、「Ⅲ 遠隔授業の方法について」の項目については当科目平均点が 4.76 と高い数値結果であった。授業では、5 領域を総合的に学ぶオリジナルシアターの制作と発表や、保育所及び幼稚園実習を想定した指導計画立案と模擬保育などを主な学習活動とした。自由記述には、「学生が興味をもって楽しめる授業内容でとても良かった」「コロナの感染状況に応じて、適宜授業内容や授業形態を変更し、配慮してくださっていたのを感じた」などが挙げられた。

○子どもの表現 B

「Ⅱ 授業について」の項目については当科目平均点が 4.74、「Ⅲ 遠隔授業の方法について」の項目については当科目平均点が 4.83 と高い数値結果であった。授業では、季節をテーマとした題材や多様な素材・用具を活用した遊びや表現について理論と実践を往還させた学習を展開し、学生の実践的指導力向上を心がけた。自由記述には、「保育現場で子どもと楽しめる造形活動を実践でき、たのしかった。今後は自分なりのアイデアも加えて遊びの発展を考えたいと思った」「先生と一緒にとても楽しんでくれたり、学生が主体的に学べる環境が整えられたりしていて、とても楽しんで学ぶことができた」などが挙げられた。

○介護レクリエーションⅢ

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。「Ⅱ 授業について」の項目については当科目平均点が 4.91、「Ⅲ 遠隔授業の方法について」の項目については当科目平均点が 4.89 と高い数値結果であった。授業では、できるだけ身近にある素材を取り上げ、素材の特性などについて実践を通して学ぶ時間を大切にされた。自由記述には、「どの内容も

夢中になって楽しむことができた」「丁寧な解説と、先生自らが見本を見せていただくことから始まり、わかりやすい授業でした」「この授業を通して、自分でも行えることが多く、新たなレクリエーションとして今後実施できると感じた」などが挙げられた。

学科・専攻：こども学科 職名：准教授 氏名：松浦崇
対象科目：社会的養護Ⅰ（講義）、社会的養護Ⅱ（演習）、子ども家庭福祉（講義）、
子育て支援（こども学科）（演習）、子育て支援（社会福祉専攻）（演習）
人間関係と援助技術（講義：オムニバス）

I 授業の目標・工夫など

「社会的養護Ⅰ」・「Ⅱ」は、施設養護（児童福祉施設におけるケア）や里親制度についての概要・実際の理解を深めることを目標としています。保育所等と異なり、施設や里親には馴染みがなく、具体的イメージをもてないことが多いことから、授業では、映像資料をはじめ、新聞記事や漫画の資料なども活用し、なるべく具体的なイメージをもてるよう工夫してきました。

「子ども家庭福祉」や「子育て支援」においても、さまざまな資料を活用し、最新の情報や、当事者の方の生の声に触れることができるよう心掛けました。

こうした授業の目標から、2021年度は主に「対面授業」にて行いました。感染拡大時には、急遽「遠隔授業」に切り替えましたが、大きな混乱なく、対応できたものと思います。また、全学共通科目である「人間関係と援助技術」については、人数も多く、複数の実習が重なるため、「遠隔授業」を基本とし、課題の提出期限を長めに設定しました。こうした配慮については、自由記述にて「良かった」という声を多くいただきました。また、最後に1回だけ「対面授業」を実施し、学科間で交流できる機会を設けましたが、この点についても「良かった」という記述が多かったため、今後も継続していきたいと考えています。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

概ね、平均を超える高い評価を得ることができたと思います。

自由記述では、映像資料が参考になったという意見が多くありました。また、「丁寧に話をしてくれた」、「詳しくわかりやすく説明して下さったので理解が深まりました」など、説明の方法についても評価をいただくことができました。今後も、資料を効果的に活用しながら、丁寧な説明を心がけていきたいと思います。

一方で、「あなた（学生）自身の取り組みについて」の部分や、授業における、学生の主体的な学びを促すための工夫については、低めの評価となりました。また、「ワークをもっとやりたかった」、「ワークの時間も欲しい」という意見もいただきました。

コロナ対応でワークを減らしたということもあったのですが、こうした指摘については真摯に受け止め、今後の改善に繋げていきたいと考えています。

III まとめ

今回、学科間で交流機会を設けたことに対する評価の記述が多かったことや、ワークを増やして欲しいという指摘などから、コロナ禍で対面での授業の実施も不確実な中、学生の皆さま

んが、より学生同士での学び合いの機会を求めているように感じられました。

感染予防は十分に留意していかなければいけません、同時に、そうした状況の中でも、できる限り、学生の皆さんが主体的に取り組み、学び合うことのできる機会を設けていきたいと考えています。

学科・専攻：こども学科 職名：講師 氏名：山本学

対象科目：保育内容の理解と方法Ⅱ（音楽）（演習）、音楽通論（講義）

[保育内容の理解と方法Ⅱ（音楽）（山本学、カタヴァ美樹、田代千早、原川葉子、丸尾真紀子、八木名菜子、山田美穂子、鷺巣貴乃、鈴木慶子）]

授業は全期間を通して対面で行った。Ⅱでは応用ピアノ伴奏法、特に子ども対象の想定で実践的な内容を45分学習し、選択音楽として45分、声楽、ギター、管打楽器、音楽療法、リトミックのいずれかを学習する。授業はレパートリーカードを採用し、独自の工夫を行っている。

アンケートは学科平均を上回り、自由記述では特に「個別指導」と内容を選択できることに集中していた。これらをさらにブラッシュアップしていきたい。

[音楽通論]

音楽史、楽典、曲の知識などを複合的、有機的に講義している。例えば、サン＝サーンス「動物の謝肉祭」のような標題音楽の標題を伏せて曲を聞き、作曲家と同じ視点に立って考えてみるなど、学生自身が音楽の深淵を少しでも垣間見ることができるよう工夫を行っている。

本年度は最初から、対面と遠隔をそれぞれ用意し、どちらを選択してもよいことにした。自由記述においてこれが好評であった。

学科・専攻：こども学科 職名：助教 氏名：名倉一美

対象科目：幼児理解（講義）、保育内容指導法（人間関係）（演習）

幼児理解（講義）は、第1回目から13回目を対面授業とし、コロナ感染が広がってきた14回目は対面と動画配信の選択、15回目は動画配信にて行った。対面授業では、さまざまな保育実践事例を読み、1人2回は発表をすることで、学生同士がお互いの異なる価値観や視点に触れられるようにした。また本講義では、保育における「記録」の重要性を上げるため、課題は記録を書く練習につながるような内容にした。反省点として、学生の発表に対する教員のコメントの質を高めることが必要である。理論的背景についてしっかりとおさえ、それらと関連付けながら、学生自身の理解が深まるようなコメントができるよう努力していきたい。

保育内容指導法（人間関係）（演習）は、5時限目という時間設定から、1回目は対面授業、その後は感染予防を考慮して対面と動画配信の選択制、感染の広がってきた14回目と15回目は動画配信とした。対面と動画のどちらを受講しても内容や課題に偏りがないう配慮をした。1講義につき1テーマを設け、講義ごとにワーク課題を設定し、各自で思考をする時間を設けた。ワークを通して、具体的な事例から深く考えるきっかけとなった学生がいたようである。反省点として、この講義は「人間関係」という曖昧で抽象的な内容を扱うものであり、授業を行えば行うほど、教員自身の思考の浅さや、表現力の乏しさを痛感している。それを改善するためにも、今後は特に、ワーク課題のための資料の精査をしていきたい。

非常勤講師 氏名：天野 ゆかり

対象科目：介護福祉論Ⅰ（講義）ユニパ+講義

本授業では、ユニパによる課題提出が中心となった。

内容としては、テキストをベースに、それに関連する動画や資料を加え、自ら考え、課題解決に向けた対策に取り組んでもらうなど、学生にとっては決して楽な内容ではなかったと思うが、提出期限に遅れることなく多くの学生が課題提出できた。

今年度は、介護保険の報酬改定があり、それに関連した新たな取り組みが求められるようになっていたため、最新の情報を提示しながら、現場の実態や今後求められる取り組みについても学んでもらった。

さらに前期はデイサービスでの実習も控えていたので、検索システムを使い、デイサービス事業所の詳細を調べ、多様な業態やサービスの特徴があることを学んでもらった。

介護百人一首の作成とコンテストへの応募も課題にあげていたが、コロナの影響で実習が延期となってしまったため、介護に関連する体験が得られず、コンテストの応募期間に間に合わなかった学生も多くいたが、学生なりの感性が光るとても良い作品を、全員提出することができた。

学生の評価やコメントをみると、数名は課題（文字数）の負担を感じているようだったが、中にはそれにより「考える力がついた」とポジティブに取られている学生もいた。実際に毎回1000字前後の課題を課していたので、簡単ではなかったと思うが、資料をしっかりと理解し、なぜそう思うのか、どうすべきなのか、ということを考えることで、全体的に記述力があがってきた。

また、毎回全体に向けて課題に対するコメントを加えた。個別にコメントが必要な学生にはその都度フィードバックしたため、それについても学生から評価を得た。

遠隔講義であっても、受け身で終わらず、様々なテーマについて能動的に取り組んだ学生の姿勢は大変評価できるものであった。

非常勤講師 氏名：伊藤 由彦
対象科目：薬理学（講義）

歯科衛生学科における薬理学は、「歯科衛生士としてさまざまな背景を持つ対象に対して安全な医療を提供するために、薬物の性質、薬理作用、作用機序および副作用を理解し、医薬品に関する基本的知識を身につける。」(GIO)ことを目的としている。後期に歯科薬理学が開講されていることから、この講義では歯科と直接の関係が少ない薬全般についてと薬物の取扱に関する一般的な知識を扱う講義となっている。

薬の作用を理解するためには、基本的な生物の知識はもちろんのこと、人体の仕組みおよび疾患の起こるメカニズムの理解（前提となる知識）が必須である。開講時期が1年生前期であること、また、高等学校での生物の履修状況がまちまちであることから、講義では薬の作用を理解するために必要な前提となる知識を解りやすく解説することに十分な時間を割くようにしている。しかしながら、高等学校で生物を履修していない学生にとってはかなり難解な話を短時間でしなければならず、難しいと感じる学生がいることに関して、事前に前提となる知識の習得が可能となるような学習資源を提供できるような工夫を考えたい。

講義についてはスライドの提示を主体とし、ビジュアルで要点をまとめたスライドを作成し説明を行っている。また、事前にスライドをユニバーサルパスポートを介して電子ファイルで配布し、タブレットで学習する学生や印刷物で学習する学生など、学生それぞれのやり方に合わせて資料を利用できるようにしている。講義後にはユニバーサルパスポートのテスト機能を活用して、その日の講義の復習に資するような確認テストを実施している。この確認テストにおいて自由記述欄を活用することで、講義での疑問点などを気軽に書き込めるようにしており、多くの学生から質問などを受けており、迅速に質問に答えると共に、全員に必要と思われる項目に関しては、講義に於いてもフィードバックを行っている。

薬理学は一般的に難しい科目として認識されていると思われる。生理学や病態に関する理解の上に薬の作用の理解が成り立つこと。また、現在進行形で薬が開発され新しい知識をどんどん求められることに起因していると考えられる。しかしながら、それは医療の進歩そのものの一部であり、医療者として新しい知識や技術を常に理解し、習得し続ける姿勢は非常に大切である。本講義では、講義で説明する内容を習得させるだけでなく、臨床の現場に於いて、新たな知識や新たな薬物に出会ったときに、自分自身でその内容を理解し、安全に患者に適応できるような方法を身につけられるような講義となるよう工夫していきたい。

非常勤講師 岡村由紀子

対象科目：乳児保育Ⅱ

I、授業カードだけでなく、授業終了後も、分からない事を質問する姿もあり、皆さん、熱心に授業に取り組む姿がありました。

II、今年度も、密になることが難しい為、授業の論議がなく、講義が一方的になり易い状況でした。そこで毎回授業後に振り返り記入する「授業カード」での疑問や質問を大事にして、必要に応じてプリントを用意する等して、次回の授業の冒頭にクラス全体の問題として、深め授業の充実に繋げることをしました。

III、「密の関係の中で発達する乳幼児時代」その密を避けることが命を守ると言う厳しい時代に直面して 2 年。大人の表情や動作が大切な乳児の時代に保育者がマスクを外すと泣くと言う子どもが生まれています。

そんな時代だからこそ「専門性」に磨きをかけて『子どもの発達を保障する保育』の学びを続け、専門性の高い実践力を身に着けてほしいと願っています。

IV、総合評価から、保育と言う仕事への興味・関心と共に、深く考える力を持つ保育者養成を願って「実践を科学する」視点で、理論を日常の具体的実践と結びつけて授業を行っていますが今年も、ねらいが一定に達せられていることが分かり、現場で学びを発揮し「子どもの笑顔が溢れる」専門性の高い保育創造を期待しています。

非常勤講師 氏名：小高 研人

対象科目：解剖学

授業の工夫

コロナ禍におけるリモート講義の問題として、学生のノートを見ることができない点が挙げられるが、それらに対応するため教科書のページを明示し対応を明らかにしたスライドづくりを心掛けるとともに、模式図や重要なフレーズはタブレット端末にて手描きすることにより、無理のないペースで学生がノートづくりできるように心がけた。

授業についての自己評価

説明の順序やスピード、画像資料の提示やノートづくりへの配慮など、授業の進行に関して準備を十分に行えた項目については概ね想定どおり順調に行うことができた。

今後の改善・工夫

学生に対する形成評価およびそれを学生に提示する方法については改善の余地があった。また、シラバスに記載されている講義全体の流れのうちどの範囲を学修しているのかを意識させることで、この教科を系統的に理解させるよう配慮したい。

授業評価アンケートにおいて、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」の項目で評価が最も低く、3.13であった。リモート講義であったため、対面と比較して質問しづらい環境ではあったが、今後はオリエンテーションなどを通じて個人に声掛けを行ってマイクをONにする行為に慣れていただくことが必要になるであろう。

学生に期待すること

解剖学を学ぶことを通じて、人体の正常な構造と機能を理解することで、実際に患者に触れる際に安全な処置が行えるようになり、かつ患者指導の際に正確かつ分かりやすい説明ができるようになることを期待する。

学生への要望

歯科衛生士になるための科目はいずれも暗記項目が多く、丸暗記だと情報量の多さに対応しきれなくなる。本講義における講義内容はすべて教科書に書いてあるため、ノートづくりの際に一字一句まで完璧に写す必要はない。その代わりに、解剖学においては形態を理解することが最も重要であるため、理解を助けるために模式図を適切に描いていただきたい。各講義において、必ず押さえておくべきポイントが存在し、これはいずれの科目においてもシラバスにも明示されているため、予習・復習の際にはぜひ活用していただきたい。

また、もし理解が不十分な分野があると感じたら、講義後の時間やオフィスアワーを利用して積極的に質問していただき、なるべく早い段階で疑問点を解消してほしい。

非常勤講師 金子雪子

対象科目：薬理学（講義）

全体的に講義に関して私語も少なく、学生が講義に集中した雰囲気の中で講義を行えた点は非常に良かった。

授業の復習がしやすいということで、好評をいただいた講義後の確認テストに関しては、毎回必須としたものの、なかには講義に出席しているものの、確認テストの受験を忘れてしまったり、受験自体を放棄している学生も見受けられたことが残念であった。

講義の内容で得た知識の定着にも役立つため、講義内容を忘れないうちに、すぐに復習もかねて確認テストに取り組むことが、薬理学を修得する上で非常に重要である。また、確認テストの最後の項目に自由記述項目を設けることにより、気軽に質問を受け付けられるようにした。その項目で熱心に質問をしてくる学生がいた一方で、活用していない学生も見受けられた。

授業アンケートで教員に質問をしたという項目が他の項目と比較して低い点数になっているのは、質問があっても、そういった質問項目を自ら活用していなかった学生がいたためと思われる。実際に、質問した学生からは好評を得ていたことから、今後は、不明な点はわからないままにせずに、教員に積極的に質問をしていく態度が期待される。

コロナの感染拡大により、急遽一部の講義が遠隔授業での対応となったが、遠隔授業に対しても授業評価は概ね好評であり、スムーズに対応できている様子で良かった。また、内容に関しても、普段の講義と異なり、何度も見返すことができる点で好評を得ていた。こうした遠隔授業のメリットもあるものの、一方で、講義室での講義は、一度の聴講で限られた時間の中で必要な知識を身に着ける集中力が必要である。

決まった時間の中で集中力を発揮する能力や一度の聴講で理解する能力というのは、将来臨床現場で必ず役に立つ能力であり、必要な技能となることから、講義室での講義スタイルにも対応できる能力も伸ばして行っていただきたい。

覚えるべき内容が膨大である薬理学を1年生でしかも短期間で学習するためには、集中して講義に取り組むことに加え、予習・復習をしっかりとしないと内容の理解に追いつかない。薬理学は薬の作用を勉強する科目であり、臨床現場にも直結する内容であり、臨床現場に立つ前に、教科書やノート、配布資料を見返すことで、薬の作用をしっかりと理解し、知識や考え方を身につけて欲しい。

1年時に短期間で履修する必要があるものの、膨大な知識の習得が必要な薬理学について、より理解を進めやすくするためにも、質問に対するハードルを下げたり、スライドを工夫するなど、来年以降の講義も改善していきたい。

非常勤講師 氏名：小山ゆう

対象科目：食生活と環境

授業評価アンケートの集計結果は、点数が全体的に高く、初めて実施した授業で不安もあったが、安心できる結果となった。

教養科目の一つとして、短期大学部全学科の学生が受講することを鑑みて、一般的な栄養や食の内容から、歯科、介護、保育それぞれに関係する内容も含めて工夫した結果が数字に表れたと感じた。

また、録画配信のオンライン授業を選択したが、かえって対面授業より質問がしやすかったらしく、質問が多く寄せられ、それに答える機会ももったことが、好評価につながったと感じた。

授業は1コマ90分であり、出席確認のweb提出課題を実施することを考えて、60分-70分ほどの録画を配信していたが、「長い」と感じるというコメントが複数寄せられ、少し疑問に思った。他の講義動画と比較しての意見だと思うので、他の授業動画はもっと短時間だったことがうかがえるが、逆にそちらはそれでよかったのかと疑問を抱いた。オンライン授業に関しては、どの大学も明確な指針はないと思うが、何が正解か教えていただければ、より、学生の満足につながる授業ができたのではないかと思う。

非常勤講師 氏名：瀬戸知也

対象科目：教育社会学（講義）

1. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫について

（1）「良かった点」について：

・受講学生へのアンケートの「自由記述欄」に、「パワーポイントが良かったです」「様々な参考資料や参考動画があり、より理解が深まりました」「様々な動画資料が毎回あり、より興味が持てたり、理解をする時の一助となったりした」とありましたので、今後の授業においても、パワーポイント資料をより充実させ、有効な参考資料や参考動画を活用した授業を実施していきたいと考えている。

（2）「改善が必要な点」について：

・受講学生へのアンケートの「自由記述欄」に、「参考動画の時間が長すぎるのではないか」という意見があった。今後は、参考動画資料を提示する際には、動画資料の視聴に要する時間に関する調整をより厳密におこなうようにしたい。

・受講学生へのアンケートの「自由記述欄」に、「学ぶ内容が抽象的なことが多いので、より具体的な内容があるともっとわかりやすいのではないか」という意見があった。今後の授業では、よりわかりやすい具体例を用いて説明するように心がけたい。

・受講学生へのアンケートの自由記述欄に、「レジュメがわかりにくかった」という意見があった。今後は、受講生にとって、よりわかりやすいレジュメ資料を作成するよう努力したい。

2. 学生に期待すること：

・授業の内容に関心をもった場合は、授業で提示された事柄の理解にとどまらず、そこで生じた疑問や興味関心を大事にしてほしいと思う。授業は、当該領域における様々な問題の所在を知ってもらうためのものであり、学習の出発点である。学生にとってより重要なことは、授業を受けた後に、授業を受けて疑問に思ったことや興味・関心をもったことを、自分の力で納得のいくまで追究していくことである。そこを大切にしてもらいたい。

非常勤講師 氏名：中尾健二

対象科目：現代と哲学

21年度は15回すべてを対面授業で実施したが、授業開始当初「ズームで実施してくれないか」というリクエストが2名の受講生からあった。理由は「木曜日は対面で行う授業はこの授業のみだから」ということであった。そのために通学するのはしんどいということであろう。対面で行うことは事前に承知していたはずだから、——例年よりも受講生が少なかったのはそのためか？——選択しなければよかったですだけではないか。一方で対面だから選択したという受講生もいたかもしれず、少々わがままが過ぎるのではないかと感じた。対面で行うもう一つの理由としては、この授業が映画やドラマといった映像作品を活用しているため、YouTubeやZoomといった外部メディアを使用することは著作権法に抵触する恐れがあり、かりにオンラインで行う場合はシラバスそのものを抜本的に変更せざるをえないこともあった。ちなみにアンケートには「遠隔授業の方法について」という項目があり、これに答えている受講生がいたようであるが、この授業はすべて対面での実施ゆえにこれに答えるのは適切ではなかったのではないか。

次に授業内容について。

1) 作品を観ている時間と講義の（話をしている）時間とのバランスの問題がある。講義部分を増やしてほしいという意見があったが、以前は「話が長すぎる」という意見もあって、どう配分するかのバランスは難しい。これは今後とも工夫を重ねていきたい。

2) この授業は「現代と哲学」というタイトルが冠されているのであるが、「哲学は学べなかった」と感じた受講生もいたようである。ソクラテス、デカルト、カント、ニーチェといった名前が出てこないと思っても無理はないけど、これは「哲学史」であって「哲学」ではない。上に名前をあげた人々もその時代と社会にとって重要な問題を考え抜いた人々であって、「哲学」という科目（！）など眼中になかったにちがいない。

3) 受講生に対する課題として、ミニレポート4本、長めの期末レポート1本を課した。

「量的には適切だった」という評価も受講生からあって、そのせいかまじめに取り組んでくれていたと思う。とくに期末レポートは出色ものが何本かあって、感心した。しかしそのためには作品をきっちり観てもらわなければならないため、講義部分が圧迫されることにもなる。したがって作品鑑賞と講義部分とのバランス問題は、正直なところ小生にとっても悩ましいのである。

非常勤講師 氏名：長坂和則

対象科目：こころの障害

今回の授業評価を受けまして、学生の皆様には補足する資料などお渡しをして、十分な説明をしたかったと思っております。同時に当事者の声もさらに届けられるような授業展開を工夫したいと考えました。「こころの障害」は、これから支援の対象をなる方々ばかりではなく、自分自身やご家族そしてとても身近な問題であることを学生にとってよりよい授業になるよう、しっかりとわかりやすく伝えられることに配慮をしたいと考えております。

非常勤講師 西田勝
文学(講義)

授業評価アンケート集計結果に対するコメント

I での番号4ならびに5の設問に対するの評価平均点が、3.0と3.4となっており、改善せねばならないと痛感している。学生の皆さんの、自律と好奇心への教員としてのアプローチの在り方についての猛省が必要であると認識された。少しでも、なんとしてでも、このスコアを上げる必要は喫緊にして肝要である。

しかし、何分にも遠隔講義で、それも動画での聴覚に訴えるす形での授業の仕方であるので双方向性は必ずしも十分に担保され難いので、学生たちがもっともっと気軽に質問を投げかけてくるような授業の在り方を模索したいと思っている。

II での番号10「シラバスに沿った」授業展開に関しては、毎年の課題であり重々心がけていることではあるのだが、何分にも「文学」との科目の性質上、知識伝達というよりも思考プロセス、感覚の震えのような、数値化がかなり困難なことに比重が高くなるものなので、ぴったりと「シラバスどおり」にすることの難易度は、物凄く高いとも思えるのだが、「シラバスは学生との契約」との言辞も聴くものであるから、満点を目指して努力をしたいと考えている。

III 遠隔授業の方法に関して、21.22.23で思いのほかの高い評点を戴いた。この結果には正直に驚いた。さらに満足度の高い方策を模索していきたい。

自由記述に対するコメント

今年度は、創作活動のかたちで学生に課題を出し、課題提出で参加意欲、熱意などを測った。課題を提出することが案外に参加意欲を引き出すようで、「文学」に少しの関心を抱いてもらうことが出来たようでもあり、遠隔授業であっても手・足・耳・目、全身を動かす能動的な受容としての「授業」の形式の進化と練磨を、さらに心がけて展開していこうとの思いを抱かしめられた。

「顔」を見ながらの授業をとの指摘はもっともであり、学生の満足のため「授業」の形態、方法のさらなる向上を目指していきたい。

非常勤講師 氏名：深江久代

対象科目：発達と老化Ⅱ（社会福祉学科介護福祉専攻 講義）、医療福祉システム論（学科共通科目 講義）

I 授業の目標・工夫など

各科目の授業目的は以下のとおりである。発達と老化Ⅱ：（１）成長・発達の観点から老化を理解し、老化に関する心理や身体機能の変化及びその特徴に関する基礎的な知識を修得する。（２）高齢者に多い疾病や老化に伴う機能低下が及ぼす日常生活への影響などを理解し、生活支援技術の根拠となる知識を修得する。医療福祉システム論：社会の高齢化が進展する中で、地域における保健・医療・福祉活動の実際や連携のあり方、地域ケアのシステム化などについて学ぶ。今年度は対面での講義ができたため、学生の反応がよくわかり、授業を進めやすかった。学生が理解できるということに心がけて、学生が関心を持てるように身近な新聞の切り抜きや、家族の体験談、視覚的に学べる動画の活用、グループワークの実施などを取り入れて展開した。また、グループで疾患や症状、留意点について調べ、発表する機会を設け、さらに学生の発表をふまえて要点をまとめるなどの工夫をした。また、ほとんど毎回パワーポイントを使ったため、時には、重要事項、キーワードなどを記入できるような資料を作成し、講義を聞くだけでなく、記入することで、理解できるような工夫を行った。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「発達と老化Ⅱ」についての授業に対する学生の授業アンケート集計結果は、24人中11人のみの回答であったが、「学生の取り組み」：3.64～4.82、「授業について」：4.36～5.00、「遠隔授業方法」：3.91であった。学科・専攻平均点と比較するとやや低かったが、授業についての中で「教員は学生の理解度に配慮して授業を進めた」が4.73、「教員は学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた」が4.64、「教員は学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫していた」が4.73、「教員は学生に対して誠実に対応していた」が4.82と良い点であった。自由記載の「この授業で良かったと思うこと」には、「病気について予防などを知ることができてよかった。」があった。「この授業で改善が必要だと思うこと」は、特に記載がなかった。

学生は大変熱心に受講し、リアクションペーパーに毎回多くの質問が記載されており、それに応えることで学習を深める良い機会となった。リアクションペーパーの記載から学生の理解度や誤った理解の確認ができるため、今後も活用できるとよいと思われる。

「医療福祉システム論」については、最近の医療・福祉の動向を踏まえ、地域包括ケアシステムや多職種連携、診療報酬制度について強化した内容を教授した。リアクションペーパーの授業の感想から、多職種連携や診療報酬について考える機会となっていると認識している。質問の記述もあることから、今後も関心をもって受講できるよう、より工夫していきたい。